
東方夢桜歌 ~ A little tenderness and some courage ~

REN

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方夢桜歌〈 A little tenderness and
some courage〉

【Nコード】

N8001Y

【作者名】

REN

【あらすじ】

ある日、とある少年が世界から姿を消した。少年が目を覚ましたとき、そこは自分がいた世界ではなかった。そこは、忘れられた者たちが集う楽園。少年は、そこで生きることを決意する。少年は何を想い生きていくのか、少女たちはどのように少年を受け入れるのか。これは、楽園で生きることを決意した少年とその楽園の少女たちの物語。

注：これは東方Projectの二次創作です。苦手な方は見ないことをお勧めします。

なお、この小説の作者はド素人です。また、投稿も気分しだいです。それでも、暇つぶし程度になればと思っています。

主人公設定（前書き）

はじめまして、RENと申します。今回はこの物語の主人公の設定です。

主人公設定

名前：一狂咲 彩人 くるいざき あやと

年齢：17歳

身長：175cm 体重：60?

細身だが程よく引き締まっている

趣味：料理、読書、ギター（歌も含む）

容姿

黒髪黒目で上の中くらい。感情が昂ぶると目が金色になる特異体質。
性格

基本的に温厚だが子供っぽさが抜けておらず時たま悪戯をする。めったな事では怒らないが怒ると怖い。

自分が面白そうと思ったことに関して首を突っ込まずにはいられずに、そのせいでケガをすることもしばしば。好き嫌いがはっきりしていて、気に入った相手が困ったりしていると何かと手伝ってくれる。が必要以上には手を貸さない。嫌いな相手や興味の無い相手は基本的に無視。なぜか、子供や動物には異常なほど懐かれる。ネコ好き。炊事、洗濯などそつなくこなせるくらいには器用。

能力：「流れを司る程度の能力」

「夢を繋げる程度の能力」

流れを司る程度の能力は、ありとあらゆる流れを自由自在にコントロールできる。また、操るだけでなく生み出すことや消すこともできる半チートの能力。しかし、（時の流れを遅くする）などは燃費が悪い。

夢を繋げる程度の能力は、誰かの夢の中に介入することができる。しかし、自分では制御できずだいたい突発的に発動するがたまに任意の相手の夢に介入できることがある。

ちなみに、霊力と魔力が備わっており総容量は霊夢より少し劣るくらい。

主人公設定（後書き）

ちょっと、つけたし。容姿とか忘れたので。某黒猫さんの設定を使わせていただきました。

夢と現の境界（前書き）

やっと1話です。

夢と現の境界

夢。夢を見た。とても不思議な夢だ。

それが夢だと認知できたのには理由がある。俺は空中に漂うように浮かんでいた。

普通の人間なら、道具も使わずに空中に浮かぶことなどできない。重力に引つ張られて落下する。にもか

side)???)

かわらず俺は浮いているんだからこれはもう夢で確定だろう。

そうして自分の中で結論づけてふと、周りを見渡した。

眼下には、今はもうほとんど見られないであろう雄大な自然が広がっていた。

木々が生い茂る森、山の上から流れる川、燦々と照りつける太陽とどこまでも澄んでいる青空。どれをとってもこれほどまでに美しいと感じさせる自然が広がっていた。

？「綺麗だな、こんなに綺麗な場所今まで見たことねえや」

現代は人工的に造られたもので溢れかえっている。今、残っている自然も人の手が加えられたもののほうが多いように感じる。

しかし、ここは人の手など加えられた形跡がまるで無く自然があるべき姿で存在している。

それは、現代で生きる少年にとってとても新鮮なもので少年はしばしこの大自然に見とれていた。

？「これが夢じゃなかったらよかったのにな、あの腐った世界よりもこの世界のほうが楽しそうだ」

少年は羨望と諦めが混ざったような顔で苦笑し、そして思ったことを口にした。

それは、少年のささやかな願い。

？「もし生まれ変わったら、今度はこっちの世界で生きてみたいな」

そう言った瞬間、意識が遠のくのを感じた。少年は少しさびしそうに

？「もう少しだけ見ていたかったな」

そう言って、意識を手放した。

夢と現の境界（後書き）

夢のなかの話でした。

夢から現実、そして幻想へ（前書き）

どうも、RENです。

今回は、現代編を一気に詰め込みました。それと、あの人が出てきます。それではどうぞ。

夢から現実、そして幻想へ

カーテンの隙間から差し込む光で目が覚めた。

???「んー、朝か」

俺こと狂咲くるいさけ 彩人あやとは朝が弱い。夜更かししたわけでも、低血圧なわけでもないのに朝が弱いのだ。

彩「5時57分、アラームの3分前に起床か。」

伸びをひとつして着替え、朝食を作るためにキッチンへ向かう。一人暮らしなので当然だが。俺には親が居ない。いるにはいるが俺は親とっていいないし、あっちも自分のことを息子とは思っていないだろう。ただ、生活費などは振り込んでくれるけど。

別に寂しくはない。俺をここまで育ててくれたばあちゃんがいたから。ばあちゃんは厳しかった。「男ができないのは妊娠と出産だけでいい」の信念の元、生活に必要なスキルは全て叩き込まれた。でも、とても暖かった。俺がまだ小さいゆえに善悪の判断もできず迷惑かけたときも

婆「迷惑をかけていけないのは他人、迷惑をかけてもいいのは家族と信頼できる友達だけなんだよ」

と、言って笑って抱きしめてくれた。その言葉を聞いたとき、とてもうれしくて胸の中が暖かくて泣き笑いながら頷いた覚えがある。それと、近所の人たちもとてもよくしてくれたから性格が曲がることはなかった。むしろ、近所の子供たちとよく遊んでくれるお兄さん的なレッテルを貼られていた。

前に、「ヒマだから遊んで」と近所の子供たちが数人家に来たことがある。理由を尋ねたら、八百屋のおばちゃんが「アヤちゃんのところに行けば遊びに困らないわよ」といったからだそう。それからというものの頻繁に子供が来るようになってついには家じゃ入りきらない人数になった。そしたら、八百屋やお肉やおばちゃんたちが学校の使用許可（校庭限定）をとってきてくれた。恐るべき、おばちゃんパワー。いつもお世話になってるし、少しでも恩返しができたらと思って子供の相手をしている。何より結構自分も楽しんでいるしね。

そんなばあちゃんも去年、寿命で亡くなった。とても、安らかな顔をしていた。葬儀には近所の人たちが大勢手伝いに来てくれた。ばあちゃんはとても人望がある人でよく相談事を、それこそ老若男女問わず受けていたから当然である。泣いたのは、ばあちゃんが死んだその日だけだった。おばちゃんたちは、俺のことをとても心配していた。「泣いたつていいのよ」と言ってくれる人もいた。そんな人たちに俺は、「もう十分泣きました」と言って笑った。そんな俺を見て、とても安堵した表情で「困ったことがあつたら力になるからね」と言ってくれた。

そんな人たちに支えられて俺はここまで生きてきた。正直ありがたいと思う。ここの人たちは大好きだ。でも、やっぱりこの世界は腐っている。

彩「うん、今日もいい出来だ」

なんだか昔のことを想い帰していても料理の手は止まっていなかったみたいだ。まあ、長らくやっていたから体が覚えてしまったんだろうな。ばあちゃんは、料理の先生もやっていたから教えられたレシピは和・洋・中からインド・ギリシャ・イタリア・フランス、デザートも和・洋・中と何でもござれな感じだ。特に和食は高級料亭レベルだったらしい。

今日は学校がある日だからそろそろ行かないといけない。まあ、俺は勉強が嫌いだし？授業中は専ら、読書（小説）か楽譜を見て脳内再生のどちらかだけだね。それでも、成績は悪くない。一夜漬け最強。

彩「時間は8時、弁当は持った、忘れ物は無し。」

外に出て、家の施錠をし自転車に跨って

「そんじゃ、いきますか」

そのとき俺は気づいていなかった。上空に胡散臭い笑みを貼り付けた金髪の美しい少女が自分を見ていることに。

俺の通う学校は家から自転車で20分のところにある小・中・高のエスカレーター式で小学生の頃から通っている。なんてったって成績さえ問題なければ受験なんて必要ない。勉強嫌いの俺からしてみればとても好条件なのだ。

子「「「あつ！、アヤ兄ちゃんおはよう！！」「」」

彩「おう！おはよう！」

小学校から通えるので必然的に近所の子供たちと一緒に登校することが日課になっている。雑談しながら走っていると校舎が見えてきた。子供たちと別れ、自分の教室に向かう。

ク「おつ、彩人！おはよー」

彩「チャオッス！」

ク「相変わらず、そのあいさつなのな」

彩「いいだろ、朝も昼も夜も同じ言葉で済むなんて合理的だし」

ク「まあいいけど。それよりさ、いい加減サッカー部に入ってくれよ。お前運動神経いいし、絶対レギュラー取れるって。おまけに顔もいいし」

彩「またその話か、何度も言うけど俺は部活には入らないよ」

俺は部活には入っていない。めんどいし、なによりそんなことに時間を割いていたら商店街がしまってしまう。頼めば売ってもらえるだろうがやはりそれは申し訳ない。それにタイムセールは時間との戦いであると同時に近所のおばちゃんたちとの死闘の場である。俺はほぼ毎日、戦場で戦っています。

クラスメイトと他愛無い話をしながら席に着く。俺には、仲のいいやつはいてもばあちゃんの言う友達に値する奴はまだ居ない。例外を除いては、

？「アヤ、やつとききましたね。もう遅いです、遅すぎます」

彩「早苗、HR開始30分前の登校が遅いとはどういう見で？」

早「私より遅い」遅すぎ、の方程式が私の頭の中では確立しているのです。」

彩「ひどい話だな。」

その例外の名前は東風谷^{いっちゃん} 早苗^{さなえ}小学校から今に至るまで同じクラス、席替えをしようものなら決まって周囲8つのうちのどれかになるという怖いくらいに腐れ縁つづりを発揮している。

一時期腐れ縁つて実は呪いなのではと本気で考えたことがある。それを早苗に話したら「諏訪子さまに聞いてみましょう」と若干暴走気味になったのは余談である。

早「そんなことより、今日はテストが帰ってくる日です。前は不覚を取りましたが今回は抜かりはありません。」

こいつは何かにつけて俺に勝負を持ちかけてくる。テストの結果から体育の授業、家庭科の調理実習etc...とにかく勝負事にできそうなことは大体持ちかけてくる。ちなみに総合的に見ると俺の圧勝。いくつか負けたものはあるけどそれでも勉強では負けたことが無い。

彩「はいはい。叶いそうに無い、いい夢だね。」

早「むっ、そうやっていい気になっていられるのも今のうちですよ。」

と頬を膨らませながら抗議してくる。やべっ！なにこの生物、超かわいいんですけど！！

と、他愛ない話をしていると

先「おい、お前ら席に着け。HR始めるぞ。」

先生が来て出席を取り始めた。

このとき、まだ俺はあんなことになるなんて思ってもいなかった。

彩「やっと終わったー！ー！」

今日一日のカリキュラムを終え、家路に着く。

早「また負けた・・・」

と隣で頂垂れているのは、言わずもが早苗である。今日のテストの結果？俺の勝ちに決まってるんだろ、まあ、5点差だったけど。

早「勝つたら、このフルーツ全部のセミナーパフェを奢ってもらおうと思ってたのに」

俺は、早苗との勝負のとき賭けを持ちかける。それは負けたほうは勝ったほうの言うことを常識の範囲内でひとつきくというものである。ただし勉強においては俺は5回勝つたら、早苗は常識の範囲の緩和が条件として加わる。めっちゃくちゃ早苗贔屓だがこれは俺から提案した。理由？早苗に勉強で負けない絶対の自信とそのほうが燃

えるし面白そうだからだ。何が面白いつて？早苗の悔しがる顔とか早苗の悔しがる顔とか早苗の悔しがる顔とか、あと早苗の悔しがる顔とか、かな。

彩「俺に勝とうなんざ2世紀はええよ」

早「でも5点差だったじゃないですか」

彩「その5点がでかいんだよ」

早「まあ、いいです。次で終わらせますから」

彩「負けフラグが立ったな」

そんな話をしながら帰路に着く。

彩「じゃ、俺こっちだから」

早「はい、明日は私より早く来てくださいね」

彩「だが断る！！」

お互いに軽口を叩き合い別れを告げる。

彩「じゃ、またな。早苗」

早「ええ、また。アヤ」

早苗と別れ俺は途中コンビニでおにぎりとお茶を買って家へと帰る。自転車を止め、鍵を開け家の中に入る。

彩「ただいまー、って言っても返事は無いけどね」

一人暮らしなのだから当たり前だ。でも、もはや習慣になってしまったので意識しないでも口が動くのだ。そして、本来なら返ってくるはずのない返事が今日に限って返ってきたのだ。

？「お帰りなさい。待っていたわ」

彩「！！！？？」

居間に行くところには見事な金髪の美少女、というより美女が座っていた。そいつは、口元を扇子で隠しとても胡散臭い雰囲気纏っていた。美人なのにもつたいない。

彩「俺は、彩人。あんた、いったい誰だ？」

？「自分から先に名乗るなんて意外ね。普通、後者の言葉が先に出るでしょ？」

彩「あいにく、少し特殊な環境で育ったもんでね。で、あんたは、いったい誰なんだ？なぜ俺の家にいる？」

紫「私は八雲 紫 やくも ゆかり よ。さっきも言ったでしょ。あなたを待っていたのよ」

紫は胡散臭い笑みを深くしながら質問に答えた。

彩「昼間から俺を見ていたのはお前か？」

その問いに、紫は少し驚いた表情をしたがすぐに先ほどと同じ笑みに戻り

紫「あら、気づいていたのね」

彩「まーな、といつても気付いたのは昼過ぎだけだな。で、俺に何のようだ？」

俺は少しおどけた風に肩をすくめ、本題の話を促した。

紫「ええ、そのことなのだけれどね」

紫は、そこで言葉を区切りこちらを見据え言った。

紫「あなたにはこれから幻想郷で暮らしてもらっわ」

彩「は？」

紫はそう言つと手を横に払った。

彩「なっ！！！！」

紫「あちらに着いたら博麗神社を尋ねなさい。そこで待つてゐるわ。」

その言葉を聞きながら体は不気味な空間に落ちてゆく。そして、意識もそれと同時に途絶えた。

夢から現実、そして幻想へ（後書き）

はい、あの人とは早苗ちゃんでした。次回は彼の能力が発動しちやいます。つっても今回たく長くするつもりはありません。

感想・誤字指摘がありましたらお願いします。
ではまた。

一人ぼっちだった少女 〈dream side〉 (前書き)

今回は彼の能力が発動しています。
それでは、どぞー

一人ぼっちだった少女　↳ dream side　

side　彩人　

気がつくと、そこは真っ白な空間だった。今朝の夢と同じような感じだ。ということは、これは夢か？でも、今朝の夢のように雄大な自然やどこまでも続く青い空はどこにも無く、先の見えない白い空間のなかにぼつんと俺が存在していた。

彩「これは、夢なのか？だとしたら、ちと殺風景過ぎやしないか？」

そんなことを考えていると、不意に声をかけられた。

？「お兄さん、誰？」

驚いて声がしたほうを振り返るとそこには少女がいた。可愛い赤い服に綺麗な金髪、頭にはナイトキャップのような帽子をかぶっていてとても可愛い娘だ。だが、それよりも目を引くものがあった。少女の背中から七色の結晶が付いた羽？が生えていたのである。

俺は、しばし呆然としていたが

？「ねえ！お兄さんは誰なの？」

少女の声ではっとして取り繕うように自己紹介をした。

彩「ああ、ごめんね。俺は彩人。狂咲　彩人だ。君の名前は？」

フ「私はフランドール・スカーレット。フランでいいよ。」

お互いに自己紹介を済ませ、俺は気になっていることを本人に聞いた。

彩「なあフラン。その背中についている羽？は本物か？」

フ「そうだよ。だって私は吸血鬼だもん。」

吸血鬼。おそらく世界でもトップクラスの知名度を誇る西洋の妖怪。その吸血鬼が目の前にいるのだ。正直信じられない。だが、この少女は嘘をついていない。日頃から子供の相手をしているせいかな、嘘を見分けることができるようになっていたのだ。

フ「ねえねえ、彩人は人間なの？」

彩「ああ、俺は人間だよ。とても脆くて儚い一人の人間さ。」

わざと芝居がかった動きでフランの質問に答える。
少女はクスクス笑いながら

フ「彩人っておもしろいね〜」

と言って二人で笑いあった。それから、いろんな話をした。主に互いの種族のことを質問したりそれに対して解答したり。それで知ったのだが十字架は吸血鬼の弱点ではないらしい。ちなみにフランは幻想郷にいらしい。しばらくこのやり取りが続いた。
不意にフランの顔に翳りと少しの狂気の色が浮かんだ。

彩「どうした、具合悪いのか？」

俺は心配になりフランにそう尋ねた。

フ「ううん、違うの。この夢が覚めたら、また一人ぼっちになっちゃうなって思っで。私は力が強すぎるから長い間地下に閉じ込められてるの。」

彩「長い間ってどのくらい？」

フ「495年間」

俺はその話を聞いて絶句した。そりゃそうだ。いくら力が強いからって495年間も一人で地下に閉じ込められるなんてそんなのは横暴だ。

気づいたら俺はフランを強く強く抱きしめていた。フランは驚いたようだが抵抗はしなかった。

彩「フラン、お前は自分が一人ぼっちって言ったがそれは間違いだ。」

フ「え！？」

彩「俺がいる。俺がフランを一人になんてさせない。」

それは、初めての感情だった。俺はただ、この少女を助けてやりたいたと思っただ。まだ、会ってから数時間しか経ってないけどそう思えるくらい、この少女のことが気に入ったんだろう。

フ「だ、だめだよ！私の能力は『ありとあらゆるものを破壊する程

度の能力】。私の近くにいたら彩人を傷つけちゃう。私、彩人を殺したくないよ。」

フランの声はだんだんと小さくなって次第に嗚咽が聞こえてきた。俺はフランの頭を優しく撫で親が子供をあやすような声音で

彩「心配してくれてありがとな。でも大丈夫、俺は死なないよ。」

と、とても穏やかな、しかし絶対の自信に満ちた笑顔でフランを見た。

フランは驚いたように目を見開き、それから顔を歪ませて、すぐるようにして声を上げて泣いた。

今までガマンしていたものが、あらゆる負の感情がフランの頬を雫となって伝っていく。

彩「一人が寂しいんじゃない。自分は一人ぼっちなんだって思うことが寂しいんだよ。それと、その悲しみは決して忘れちゃいけない。それはフランだけの強さになるはずだから。」

俺は腕の力を緩め、今度は包み込むようにしっかりとフランを抱きしめ頭を撫で続けた。

フランの涙はとても綺麗な色をしていた

俺とフランの体が透けていく。目覚めが近いのだろう。フランは不

安そうにこちらを見ていた。そんなフランに俺は一言だけ言った。
それは、別れを悲しむ言葉ではなく再会を約束する誓いの言葉。

彩「またなフラン、———！！」

フ「うん！！」

そう返事をしてフランドール・スカーレットは花のように笑った。
その笑顔に狂気の色は微塵もなかった。

side フランドール

見慣れた天井、見慣れた壁、見慣れた床、いつもと変わらない私の
世界。けれど心の中はいつもと違っていた。

とても暖かな気持ちで満たされていた。ふわふわした感じがとても
心地いい。

フ「えへへ」

夢での出来事を思い返すたびに頬が緩む。495年間、他人の温も
りに飢えていた少女にとってまさに至福の時間だったのだ。

しかし、そんな時間が夢だと分かった時普通なら絶望する。大きい幸せなら反動も大きいはずだ。

少女、フランドールは夢から覚めても絶望せず、むしろその目には強い光が宿っていた。

フ「絶対に迎えに行くからいい子で待ってるよ、か」

それは、夢から覚める直前に彼が言った言葉。彼が来てくれる保証はない。それでもフランは信じてみようと思った。

自分を救ってくれた、あの暖かくて優しい彼の言葉を。それに、フランは直感的に感じていた。

フ「また、夢の中で彩人に会える気がする。」

だから、自分も頑張ってみようと思った。この力を扱えるように、この力と向き合うために。

フ「私頑張るから、いい子にしてるから、だから」

フ「だから、早く迎えに来てね彩人！」

少女は、どこにいるかも分からない彼に向けて言った。

一人ぼっちだった少女 \ d r e a m s i d e \ (後書き)

なんだかすごくあっさりしているような気がします。

もうちょっと何とかできたかも知れませんが作者の文章力ではこれが限界です。

感想、誤字指摘ありましたらお願いします。

闇を纏う少女

side 彩人

俺は現在、博麗神社なる場所に向けて歩いている。

何故、見知らぬ土地で目的地の場所が分かるかというところまで遡る。

夢から覚めた俺は、いきなり思考が停止した。

だって 十数匹の猫が自分に丸めた体を密着させ寝ているのだ。そのうちの一匹は腹の上で寝ている。

通りで暖かいわけだ。

起こすのも忍びないがこのままというわけにもいかないので体を起こす。

すると寝ていた猫たちも各々伸びをして周りにゃーにゃー鳴いていた。

彩「さて、紫は博麗神社で待つてるって言ってたか？つーか、初めての土地で地図もなしに特定の場所に行くってこれなんて無理ゲー？」

せめて方角だけでも分かれば何とかなりそうなものだが。

俺は文字どおり猫の手も借りたい心境で聞いてみた。

彩「なあ、博麗神社ってどの方角にあるか知らないか？」

自分でなにやってんだろうなと思いつつどうするか考えようとしたとき、お腹に乗っていた猫がある方角を向いてにゃーにゃー鳴いた。よく見ると、その黒猫は尻尾が2本あり緑の帽子を被って耳には金

の輪を付けていた。

彩「この方角にあるのか？」

そう聞くとまるで返事をするかのごとくニヤーと鳴いた。

普通なら偶然で片付けるが今までの出来事からこの猫に乘せられるのも一興と思い、

彩「そつか、ありがと。助かったよ。」

と、黒猫の頭を撫でてやりその方角へ歩き出した。

side{??{?

？「不思議な人間だったな」

彼が見えなくなった後、私は猫の姿から人の姿に戻った。

今日もいつものようにマヨヒガ周辺の猫たちを集めて言うことを聞くように訓練しようと思っていた。

が、猫たちは見つからずしばらく探していると毛玉を見つけた。

それは、探していた猫たちが一人の少年に寄り添って寝ていたのである

ここいら周辺の猫たちは警戒心が強く、猫の妖獣であるわたしも警戒を解くのには苦労した。

それなのに、この少年の周りには多くの猫たちが寝ている。

有り得ない。

ただの人間に最初からここまで近づき、ましてやとても気持ちよさそうに寝ているなんて。

だが不思議だ。寝ているからなのかどことなくこの少年には警戒心が沸いてこない。

他の子たちを見ていると自分も眠くなってきた。

？「ちょっとだけ寝ちゃおうかな」

そう思った時にはすでに彼の隣まで来ていて、彼を起こさないように猫の姿で彼のお腹に乗った。

何故そうしたか自分でも分からない。ただ、

？「いいにおい／＼／」

とても安心できた。そのまま、彼の心臓の音を聞きながら眠りに落ちた。

起きた彼は、博麗神社に行きたがっているようだった。

だから、私は神社のある方角を教えた。

そしたら、彼はお礼を言って頭を撫でてくれた。

私の主とその主の主、二人とは違う大きくて暖かい手が私の頭を包んでいた。

しばらく撫でてくれたその手は不意に離れていき名残惜しくもあったが彼は皆にお礼を言って歩き出した。

？「気持ちよかった／＼／」

頭を撫でられていた余韻を感じつつ、思ったことを口にしていった。

？「また・・・会えるかな。」

今度はこっちの姿で。

side 彩人

もうかれこれ数時間は歩き続けている。あたりは暗くなり始めていた。

今は初夏だから寒さで死ぬことはないだろうけど、できれば日が沈む前に神社に着きたかった。

日はとくに沈み、空には綺麗な満月が浮かんでいた。

彩「しゃーない、今日はこっからで野宿か。」

ここにきたときに、何故か持っていた自分のバック。

中身は三日分くらいの栄養食とお菓子、水が入っていた。

どれも家にあつたものだ。紫が置いてくれたのか？しかしどうせなら、神社に落としてほしかった。

と、どうしようもないことを思いながら空を見上げた。

彩「綺麗な満月だな」

？「そうなのか」

彩「そうなのか、じゃなくて空を見れば分かるだろ。」

？「ほんとだ」

彩「それで、君は誰だい？俺は彩人って呼ばれてる」

ル「私はルーミアって呼ばれてるよ」

唐突に始まった自己紹介、俺の言葉を真似るように話す少女だが、俺は直感で感じていた。

こいつは人間じゃない。

フランや道を教えてくれた黒猫と似た雰囲気を感じる。

何より、彼女の周りには闇と形容するのがふさわしい黒いもやみたいなものを纏っていた。

俺と少女はほぼ同時に喋っていた。

彩「君は」

ル「あなたは」

彩「俺を食べる妖怪？」

ル「食べられる人類？」

そして、無言のままお互いに見つめ合う。

どのくらいの時間そうしていただろう。

1分？10分？それよりも長く？経過した時間は分からないが沈黙は唐突に消えた。

彩「つぷ、くすくす、あははは！！」

ル「????」

ルーミアは突然笑い出した俺に訳がわからずきよとした顔を向けていた。

彩「いや、ごめんごめん。ほぼ同じタイミングでまったく逆の事言うからさ」

そう言つて、またからからと笑った。

どうやら笑いのツボに入った用である。

しばらく呆然と眺めていたルーミアだったが釣られたのか

ル「っふふ、くすくす、あははは」

ルーミアまで笑い出した。

そうしてお互いに落ち着くまで笑った後、俺はルーミアにひとつ提案をした。

彩「なあ、ルーミア？お腹が空いているなら俺を食べるよりも、もっといいものがあるぞ」

ル「それっておいしいの？」

彩「それは食べてからのお楽しみって事で。もし、満足できなかつたら俺を食べてもいいよ。期待以上なら俺を食べないって約束してくれるか？」

ル「うん」

ルーミアは少し考え、やがて

ル「分かった。それがおいしかったら彩人を食べない。約束する。」

目を爛々と輝かせ、大きく頷いた。

嘘はついていない。

確認するとバックから板チョコを取り出し欠片をルーミアに渡した。

ル「これが、そのいいもの？」

彩「そ、まあ食べてごらん。きつと気に入るから。」

ルーミアはゆっくりと口に入れ、咀嚼し飲み込んだ。

ル「おいしい！！すごくおいしい！！ね、もつと頂戴！！」

どうやら気に入ってくれたみたいだ。

これで食べられることはないと思うが、今にも食べられそうな勢いで身を乗り出してくるルーミアに全体の半分をあげた。

とても幸せそうな顔をしてチョコを食べる姿は年相応の女の子にしか見えない。

俺はその姿を見ながらルーミアに質問していた。

彩「なあ、ルーミア、博麗神社ってどこにあるか知ってるか？」

食べ終わったらしいルーミアは、満足げな顔をしながら

ル「あの、紅白のいる場所？知ってるよ」

紅白とはおそらく巫女の事だろう。衣装が紅白だし。

彩「その場所を覚えてくれないか？そこに用があるからさ」

ルーミアは少し考える素振りを見せ、上目遣いでこう言ってきた。

ル「私も一緒に行つていい？そしたら教えてあげる。」

ツツツ！！これは反則だろう。

美少女に上目遣いでお願いされて断る奴は男じゃねえ。

彩「いいのか？ルーミアが迷惑じゃなければ願ってもないけど」

心の動揺を抑えつつ何とか平静を保てたようだ。

ル「決まりね！！それじゃ明日に備えてもう寝よう。」

そう言うやいなや俺の隣に腰掛け、もたれかかるように体重を預けてきた。

なんというかずいぶん無防備なんだな。

襲われるとか考えないのかね。

襲うつもりもないけど。

俺は断じてロリコンじゃない！！ロリコンじゃない！！

大事な事なので2回言いました。

ルーミアはすでに寝息を立てており、その寝顔はとてもかわいらしいものだった。

彩「明日には、着けるといいけど」

そう一人ごちながら意識を手放した。

闇を纏う少女（後書き）

ルーミアって可愛いですね。見ているととても和みます。

氷精と弾幕ごっこ（前書き）

すみません。仕事で出張だったものですから投稿できませんでした。たびたび、間が長い時もありますがお勘弁を。それでは、どぞ！。

氷精と弾幕ごっこ

side 彩人

ちゅん、ちゅん。チチチ。

小鳥のさえずりで目が覚めた。

朝が来たのだ。初夏といっても朝早くは、まだ野宿するには気温がいささか低い。

下手をすれば、体調を崩していたかもしれない。

しかし、それは無い。

むしろ、とてもさわやかな気分だ。

その理由は、いまだに俺の胸に頭を預けて気持ちよさそうに寝ている少女のおかげだ。

彼女と寄り添って寝ていたのでそれなりに暖かった。

が、そのために体がガチガチに固まってしまった。

ほぐしたいところだが、この可愛い寝顔をもう少し見ていたかった。

少女の顔に手をそえそつと撫でる。

彩「ありがとな」

ルーミアを起こさないように小声でお礼を言った。

くすぐったかったのか身をよじり顔を胸にグリグリと押し付けてきた。

俺は苦笑しながら、もうしばらくはこのままで居ようと思いルーミアの頭を優しく撫でた。

それから、30分ほど経ってからルーミアが起きたので朝食を摂った。

朝食後、顔を洗いたいのでルーミアに聞いてみた。

彩「この近くに水辺ってないかな？」

ル「あっちの方に湖があるけど、神社は？」

彩「人に会うのにみすばらしい格好じゃ印象が悪くなるだら。だから、案内してくれ。」

ル「わかった。あっちだよ。」

湖があるであろう方向を指差しルーミアが言った。
が、動こうとしない。

どうしたのか？と、聞こうとしたら自分の後ろに回って肩に飛び乗ってきた。

いわゆる肩車である。

ル「おー、たか〜い♪」

彩「ルーミア、何故そこに乗る？」

ル「なんとなく？」

彩「俺に聞くなよ・・・」

まあいいか、そんなことより顔を洗うために湖に向かった。
道中、ルーミアがとても上機嫌だったのは余談である。

湖に着いたので早速顔を洗い、うがいをし多少口の中がさっぱりした。

が、少し違和感を感じた。

彩「つめてーな」

いくら早朝とはいえ湖の水は驚くほど冷たかった。

ルーミアに理由を聞いてみると

ル「あゝ、それはこちら辺にチルノがいるからだよ」

彩「チルノ？」

ル「そ、氷の妖精で私の友達」

ルーミアがそう答えた瞬間、氷が降ってきた。

雹とかみぞれとかそんなレベルじゃない。

氷柱を人の腕くらいの大きさにしたサイズのものが降ってきたのだ。俺はすぐにルーミアを抱えて走り出した。

自分たちがいたところは見事にちっちゃな氷山と化していた。

？「最強のアタイの攻撃をよけるなんて、あんたなかなかやるわね！」

その声は空から聞こえた。

見上げると、青い服に青い髪、頭には青いリボンを付けた少女がいた。

それだけなら、普通の可愛らしい少女だろう。

浮いている時点で普通ではないがこの際気にしない。

ルーミアだって所見では浮いていたし。

彩「氷の羽・・・」

少女の背には氷の羽が生えていた。

この少女がルーミアがさっき言っていたチルノなんだろう。

ル「チルノ、おはよ」

チ「あ、ルーミアじゃない！おはよー」

二人があいさつを交わす。

やはり目の前の少女がチルノであっているようだ。
それよりも気になっていることを聞いた。

彩「どうしていきなり攻撃してきたんだ？」

チ「そんなの決まっているじゃない、あんたがアタイの縄張りで勝手なことをしていたからよ」

と、胸を張って言い切った。

ルーミアに視線を送ると首を横に振った。

どうやらチルノが勝手にそう言っているようだ。
なんて傍迷惑な。

チ「そんなことより、アタイと勝負よ！！」

彩「なんで？」

チ「それは、アタイが最強だと証明するためよ」

俺はこの一言で悟った。

ああ、こいつは馬鹿なんだなと。

チ「それじゃ、いくわよ。」

彩「やべーな・・・」

はつきり言っであのサイズの氷柱を食らって無事でいられる自身が無い。

ルーミアに助けを求めようとして、ルーミアの方を見ると

ル「彩人く、がんばって〜」

完全に傍観者を決め込むつもりだ。

俺はため息を吐いて、

彩「しゃーない、やるだけやってみますか」

覚悟を決めた瞬間、先ほどと同サイズの氷柱が弾幕となって襲い掛かってきた。

彩「わっ、ほっ、おわっ!!」

何とかあたらないようにかわしていく。

チ「なかなかやるわね、ならこれでどうだ!」

チルノはカードのようなものを出して上に掲げて叫んだ。

チ「氷符『アイシクルフォール』」

叫んだ瞬間、今までとは異質の弾幕が襲ってきた。
両側から挟み込むように迫ってくる弾幕に気を取られ前方から来る弾幕への対処が遅れた。

彩「やべっ！！」

ル「彩人！危ない！！」

ルーミアが叫んでいるのが聞こえたが、それどころじゃない。
回避を諦め、来るべき衝撃に供え身を固くした。
が、いつまで経っても衝撃が来ない。

目を開けてみると、弾幕のスピードが極端に遅くなっていた。
弾幕だけじゃなく全ての動きが、まるでスローモーションの世界に入ったかのように遅くなっているのだ。

彩「これは、いったい・・・？」

考えても仕方ないので、とりあえず弾幕の軌道上から逸れた瞬間普通のスピードに戻った。

ルーミアの方を見ると安堵の表情を浮かべていた。

チ「今のをかわすなんて、あんた人間にしてはなかなかやるわね」

彩「そりゃ、どーも」

なんとか、危機は去ったが問題は他にある。

こちらは攻撃手段が無いのだ。

ゆえに、チルノを止める術が無い。

チ「じゃ、次行くよ。凍符『パーフェクトフリーズ』」

虹色の弾幕が無造作にばら撒かれた。

偶然、自分のほうには来なかったので動かないでいると玉の動きが止まり色が白になっていく、つかこちらに向かってきた。

彩「マジかよ！・・・ん？」

突然のことに驚いたが、さっきまでと違うことがあるのに気が付いた。

彩「弾幕一つ一つの動きが分かる！？」

どうしてこうなったか分からないが、ひとつ面白そうなことを思いついた。

飛び交う虹色と白色の弾幕、遠目から見ればとても綺麗だろう。

そう思った瞬間、ひとつのビジョンが浮かんだ。

それは、白と虹の玉の中で舞う自分の姿。

俺の体は自然に動いていた。

side〜チルノ〜

アタイは勝利を確信していた。

人間が、おそらく初めてであろう弾幕ごっこで勝てる確率はほぼ0。ましてや空も飛べず、弾幕も打てないただの人間だ。

負ける要素はひとつも無い。
むしろ、よく粘ったほうだ。

本当はスペルの一枚目で決まったはずだった。
だがあの人間はかわしていた。

どうやったかは分からないが運がよかったのだろう。
だから、2枚目で終わるはずだった。

それが・・・、

彩「なんで？なんであたんないのよー！ー！！」

人間は踊っていた。

それも弾幕の一番集中している部分で。

その顔は笑っていた。

新しいおもちゃを与えられた子供のように、目を爛々と輝かせ襲い
かかる弾幕を全て紙一重でかわして。

そして彼は踊り（かわし）きった。

スペルはあと一枚。

チ「なら、これで決めてやる。雪符『ダイヤモンドブリズ』」

そのスペルが宣言されることはなかった。

side 彩人

弾幕が止んだ。

攻撃が止まるのと同時に俺の舞も終了した。

なかなかうまくいったと思う。

とはいっても、迫る弾幕をかわす際に踊るように動くだけである。何かをイメージしているとかそんなのは微塵も無い。

ルミアの方から歓声と拍手が聞こえてくる。

それに軽く応え、チルノに意識を集中した。

どうやら最後の攻撃を行うようだ。

だが、チルノの声は第3者の声によってかき消された。

？「だめーーーーー！！！」

チルノの後ろから緑髪の少女が腕を交差させてチルノに突っ込んでいった。

チ「ガッ！！」

いわゆるクロスチョップを食らったチルノはそのまま湖に落ちていった。

？「もう！湖は皆のものだっていつも言っているでしょ！！チルノちゃんが湖を独り占めしたら皆が困るんだよ！！！」

チルノが落ちていったのも気づかずに注意文句を並べる少女。

こちらから声を掛けないと話が進まなそうなので緑髪の少女に声を掛ける。

彩「あの〜」

？「あぁっ！チルノちゃんがご迷惑をおかけしました。私からよく言い聞かせて置くので許してあげてください。」

と、声を掛けたらいきなり謝られた。

とりあえず落ち着かせるために子供をあやす常套手段を使った。

彩「気にしてないから、とりあえず落ち着いて、ね？」

なでなで

と、緑髪の少女の頭を撫でた。

？「ふえっ？あっ・・・はうっ／＼／／」

彩「落ち着いた？」

？「は、はいっ／＼／」

うん、どうやら落ち着いたようだ。

若干、ルーミアがむくれているような気がするが気にしない。

彩「俺は狂咲 彩人。好きに呼んでくれ」

大「私は大妖精です。皆からは大ちゃんって呼ばれています」

彩「よろしく。時に大ちゃん」

大「なんですか？」

彩「チルノが湖に浮かんでいるんだが？」

大「えっ？きゃーーーーー、チルノちゃーーーーーん！……！」

と、叫んでチルノのところに飛んでいった。

いじりがいがありそうだな、と思いながら腰を下ろしてチルノ救出劇を見ていた。

すると、ルーミアが隣に座ってこちらを見てきた。

どこかものほしそうな、何かを期待しているそんな目だ。

俺はすぐに思い当たってルーミアの頭に手を伸ばした。

なでなでなで

ルーミアは少し驚いたようだが、頬を朱に染め気持ちよさそうに目を細めた。

大ちゃんがチルノを抱えて戻ってくるまでルーミアを撫で続けた。いつになったら神社に着くのか・・・

氷精と弾幕ごっこ（後書き）

チルノの弾幕で一番避けにくいのはアイシクルフォールだと思うのは私だけでしょうか？

楽園の巫女と普通の魔法使い（前書き）

連投かと思ったら日付が変わっていた・・・だど？

楽園の巫女と普通の魔法使い

side 彩人

大ちゃんがチルノを抱えて戻ってくるのを確認した俺は立ち上がり服に付いた汚れをはたき落とす。

ルーミアも立ち上がり同じ動きをする。

さて、一悶着あったがそろそろ神社に向かうとしよう。

彩「さて、いいかげんそろそろ神社に向かうか」

ル「そうだね、紅白もいい加減起きてると思うし」

そう言うのとチルノの介抱をしていた大ちゃんがこちらの言葉に反応した。

大「あつ、もう行かれるんですね。本当にチルノちゃんをご迷惑をおかけしました」

と、深く頭を下げてきた。

彩「さつきも言っただけに気にしてないって。それよりチルノが起きたら伝えてほしいことがあるんだけど」

そう言って大ちゃんに伝言を預けた。

大「分かりました。チルノちゃんが起きたら伝えておきますね」

彩「ありがとう。それじゃ、またな」

ル「またね」

大「はい、また何時でも来てください」

それを聞いた俺とルーミアは別れを告げ、神社に向けて歩き出した。大ちゃんは見えなくなるまで大きく手を振っていた。

side→チルノ

チ「あれ？・・・ここは？」

何時寝たんだっけ？と思いながらアタイは体を起こした。

大「あつ、チルノちゃん起きたんだね」

チ「大ちゃん・・・？」

隣を見ると大妖精ことアタイの友達の大ちゃんが居た。

頭が覚醒するにしたがって先ほどの記憶が思い出される。

確か、人間と弾幕ごっこしていてそれで最後のスペルを唱えようとした直後に背中に衝撃が走ったのだ。

そこまで思い出し、アタイは俯いた。

チ「そっか・・・アタイ、負けたんだ・・・」

負ける要素などひとつも無かった。
が、アタイは負けた。

目の辺りが熱くなり、溜め込んだものが押し出ようとしている。

大「違うよ、チルノちゃんは負けてないよ!」

チ「えっ?」

アタイは大ちゃんの言葉が信じられなかった。

実際にあの人間はここに居なくて、アタイは倒れていた。
普通は負けたと思うだろう。

大「実は彩人さんから伝言を預かっているの」

彩人とはあの人間の名前だろう。

そういえば、名前を聞いてなかったなと思いながら

チ「なんて、言ってたの?」

アタイはあの人間がなんて言ってたか気になり大ちゃんに詰め寄った。

大「『すっげえ楽しかった。また今度遊ぼうな、そのときは決着つけようぜ。それまで今より強くなっていい子にしてろよ』って」

アタイはそれを聞いた瞬間、胸の辺りが熱くなった。

周りは妖精っただけで自分のことを馬鹿にする。

それが悔しくて、情けなくて強くなろうとした。

でも、ぜんぜん届かない。

負けるたびに馬鹿にされる。

今回もそうだと思った。
ただど違った。

アタイと戦って、楽しいっていう奴は今まで居なかった。
逆にあっちのほうから、またやろって言われたのは初めてだった。

チ「ふふふっ」

アタイは笑った。
可笑しくて、うれしくて今までこんな気持ちになったことなど無かった。

チ「面白い人間だったね」

大「とてもいい人だったよね」

アタイは強くなるって決めた。
見返すためではなく、次に会ったときもあの人間と楽しく遊ぶために。

チルノの目には力強い光が灯っていた。

side「彩人」

俺目の前にはひとつの試練が立ちはだかっていた。

彩「ここをのぼるのか・・・？」

途中、鳥居が見えたからここに神社があるのは間違いない。
が、神社に続くであろう階段が問題なのだ。

そこまで高い山ではないが、階段はキツイ。

ル「早く行こうよ」

ルーミアが急かしてくる。

ここで考えても仕方がないのでとりあえず登ることにする。

少年登山中・・・

30分後、ようやく鳥居までたどり着いた。

今さらだがルーミアを降ろせばもう少し楽だったな、と思っても後の祭りである。

彩「ここが、博麗神社か・・・」

なんというか、自分の世界の神社と対して変わらない。

とりあえず賽銭でも入れるために、賽銭箱まで行った。

通貨が同じだとは思わないがこういうのは気持ちが大事だ。

ルーミアにも硬貨を渡し一緒に投げ入れる。

シャランシャランと鈴を鳴らし、二礼二拍一礼と願いを言った。

彩「これからも面白可笑しく暮らせますように」

ル「おいしいものがたくさん食べれますように。それと・・・」

ルーミアの最後のほうはよく聞こえなかったが、頬が少し赤いような気がした

一通り参拝を終え、巫女さんが居るとの話なので探そうと・・・

？「ご参拝ありがとうございます。その願い叶うといいわね」

ズシャアツつとまるで狙ったかのようなタイミングで、紅白の巫女服？を着た少女が境内の裏の方から飛び出してきた。
疑問系なのは、腋が露出しているからだ。

？「博麗神社に賽銭が入っているとこなんて始めて見たぜ。お前もなかなか稀有な奴だな」

巫女さんの後から、どっからどう見ても魔法使いな格好をした金髪の少女が歩いてきた。

彩「俺は、狂咲 彩人。好きに呼んでくれ。こいつはルーミアだ」

と、とりあえず自己紹介しておく。

霊「彩人ね、私はこの博麗神社の巫女をやっている博麗霊夢よ」

魔「私は霧雨魔理沙、普通の魔法使いだぜ」

お互いに、自己紹介を終えると魔理沙が聞いてきた。

魔「そいつ妖怪だろ？なんで妖怪が人間と一緒に居るんだ」

霊「理由しだいじゃ退治するわよ」

霊夢はルーミアに向けて殺気を飛ばす。

俺はルーミアの前に立ち、

彩「こいつは俺をここまで連れてきてくれたんだ。だからそんな怖い顔しないでくれ」

俺はそう頼んだが、

霊「分らないわよ？油断させて後ろからガブツって食べるつもりかもしれない」

霊夢が手を口に見立てて、ジェスチャーをする。

その言葉にルーミアは何か言い返そうとしたが、その言葉を遮り

彩「それでも俺はルーミアはそんなことしないって信じてる」

魔「その根拠は、何なんだぜ？」

今度は魔理沙が聞いてきた。

その瞳は何かを期待しているようだった。

俺は悪戯を思いついた子供のような表情で自信を持って言い切った。

彩「勘だっ！！」

その瞬間、音が離脱した。

霊夢や魔理沙、ルーミアまでもがぼかんと口を開けて固まっていた。そんな中、俺は言い切った爽快感と達成感に浸っていた。

先に沈黙を破ったのは魔理沙である。

魔「あっはははは！お前面白い奴だな。霊夢、お前の専売特許無くなっちまったな」

そう言ってまたからからと腹を抱えて笑った。

霊「うっさいわね、確かに面白い奴だとは思っけど。こんなところ

ろで立ち話もなんだし上がりなさいよ、ルーミアも」

呆れたような口調、だがその顔は楽しげに笑っていた。

どうやら、魔理沙の期待に応えられたようだ。

そのことに安堵していると、背中に衝撃が走った。

見ると、目に少し涙を浮かべたルーミアが首に手を回し後ろから抱き付いてきていた。

ル「彩人、ありがと！」

彩「どういたしまして」

俺はルーミアの涙をそっと拭ってやった。

縁側に腰掛け出されたお茶を一口飲み一息つく。

む、うまいな。香りもいいし、入れ方が上手いな。

などと、感心していると

霊「それで、何だってこんなところまでやってきたのよ」

俺が一息ついたところを見計らって霊夢が聞いてきた。

魔「そうだぜ、わざわざ賽銭を入れるためだけに来たわけじゃないんだろ？」

魔理沙も興味があるらしく、こちらを見てきた。

彩「あー、それは俺をここに連れてきた張本人に聞いたほうがいいだろうな」

そういうと、二人はルーミアのほうを見た。
ルーミアは茶菓子を頬張っている。

彩「ああ、ルーミアじゃないよ。紫、居るんだろ？」

そういうと、奇妙な音を立てて空間に亀裂が走った。
亀裂は音を立てず広がっていき、中から俺をここに連れてきた張本人、八雲紫が上半身だけの姿で出てきた。

紫「はい、意外と早かったわね」

相変わらず胡散臭い雰囲気と笑顔を貼り付けてそう言った。

彩「ま、運がよかったんだろ」

俺はそれにおどけたように返した。

魔「彩人って、外から来たのか？」

魔理沙が珍しいものでも見るかのように聞いてきた。

彩「気づかなかったのか？」

魔「ここら辺じゃ見かけない奴だな、とは思っていたが外から来た奴なんて初めて見たぜ」

こちらをじろじろと見てくる。むず痒いな。

霊「ちよつと、紫。また、何か企んでいるんじゃないでしょうね」

霊夢は外から来たことにあまり興味が無いのか、あからさまに嫌そうな顔をして紫を見る。

紫「あら霊夢、流石ね」

どうやら予感が的中したようで、霊夢はさもめんどくさそうな顔をしている。

彩「それは、俺がこの世界で暮らすことに関する何か？」

多分これが理由だろう。

つか、落とされる前にそう言われたし

紫「あなたも理解が早くて助かるわ」

紫はうれしそうに笑う、胡散臭さは消えないが。

紫「あなたには能力が備わっている。それは現代ではとても危険なもの。ここはそいつたものを全て受け入れる楽園」

楽園ね、少なくともあちらの世界よりは断然こちらのほうがいい。

彩「俺は、あちらの世界には戻れないのか？」

別にあちらの世界に未練は無い。無いが後腐れの無いように後始末だけはしたかった。

不意に服の袖が引かれた。

見ると、ルーミアがまるで迷子にでもなったかのような表情を浮かべていた。

その瞳は不安の色に揺れている。

ル「帰っちゃうの？」

声と手が震えていた。

俺は少し反省しながら、ルーミアを優しく抱き寄せて頭を撫でてやった。

彩「大丈夫だよ。ただ少しだけあっちの世界で後始末するだけだから」

どうやら不安は取り除けたようだ。

ルーミアは抱きついて頭をグリグリと押し付けてきた。

ルーミアの頭を撫でながら、話を進めた。

彩「それで、どうなんだ？」

紫「少しの間なら大丈夫よ」

なら、俺の答えは決まっている。

彩「俺は、この世界で生きていく」

その答えに紫は満足そうに笑い、

紫「そう。なら、あなたにはここで、1年間ほど修行してもらっわ」

彩「ここでって霊夢のところですか？」

紫「そうよ、ここで弾幕の打ち方と空の飛び方、能力の使い方を学んでもらうわ」

その言葉に霊夢は、

霊「それは別に構わないけど、報酬はあるんでしょうね」

ジト目でにらみつける霊夢に紫は、

紫「向こう1年間のお酒と食材の提供でどうかしら」

霊「乗ったわ!!」

その変わり身の早さに関心していると魔理沙が聞いてきた。

魔「彩人の能力って何なんだぜ？」

彩「さあ？わかんね」

その言葉に紫は、

紫「目を閉じて自分の中に意識を集中してみなさい」

言われたとおりにやってみると、すぐに見つけることができた。

彩「【流れを司る程度の能力】と【夢を繋げる程度の能力】か」

魔「どんな能力なんだ？」

彩「おそらく流れに関係するものは例外なく操れるとかそんなんだろ。夢を繋げる程度の能力についてはよくわからん」

魔理沙はなんだよそれー、と文句を言っていたが分かんものは分からん。

彩「ああ、それとなんか力みたいなのが二種類ほどあったな」

紫「それは霊力と魔力ね」

紫によると霊力は身体能力の向上や物へ付加能力を付けることができるらしい。

魔力は自然に干渉しないで現象を起こしたりするのに向いているが基本的にはどちらも同じように扱えるらしい。

ちなみに霊力と魔力が半分ずつ、総容量としては霊夢に少し劣るくらいだそうだ。パネエ・・・。

今後の方針も決まったし、そろそろ後片付けに行きますか。

彩「紫、1週間ほどあっちの世界に連れてってくれ」

紫「わかったわ、それじゃ行きましょう」

霊夢と魔理沙、ルーミアにしばしの別れを告げ少年は世界から消えるために元居た世界に帰っていった。

楽園の巫女と普通の魔法使い（後書き）

ああ、とても眠い・・・

別れ、そして旅立ち（前書き）

連投です。

もしかしたら、もう一話投稿するかも？

別れ、そして旅立ち

side 彩人

紫「それじゃ、1週間後に迎えに来るわ」

そう言つて隙間に戻つていった。

周りを見わたす。

見慣れた自分の家、外を見ればさまざまな人たちがせしわなく動いていた。

彩「帰ってきたのか」

この発展を遂げたゆえにすばらしく腐つた世界に。

彩「さて、やることは山積みだ」

まずは、高校で退学の手続きをする。

クラスメイトには、決心が鈍るから、と8日目まで話さないことにしてもらつた。

ご近所には引越しをする事と遠くに行くから多分戻つてこない事を伝える。

子供たちは号泣して胸が痛んだがなんとか納得してもらつた。

6日目の日にはお別れ会を盛大にしてくれるという、ありがたいな。やっぱりここの人たちのことは大好きだ、それだけは変わらない。

それから、親に連絡。

必要最低限の会話しかしていない。

いつても、こちらが一方的に話すだけであちらはただ聞いている

だけ。

唯一話したのは、「そうか」の一言だけ。

それを境に最後の会話は終了した。

それと、家の中を空っぽにするのに大分掛かった。

マンションなので家の中のものを根こそぎ片付ければいいのだが、量が量だ。

全て片付けるのに2日掛かった。

後は最終日までで契約打ち切りの手続きをする。

せっかくだから、貯金を全て下ろしてルーミアや霊夢たちにお土産を買っていく。

もっぱら、お菓子とジュース、後はお酒が多数。

大きめのダンボールで10箱は軽くなる。

それでも全額使うには至らなかった。

通帳を見たとき軽く8桁はあった。

婆ちゃん、貯めすぎ。

これはあとで紫に相談してみるか。

もしかしたら、あつちでも使えるかもしれない。

6日目には約束どおり、お別れ会に行った。

子供たちが次から次へと泣きながら別れを惜しんでくれる。

全員を落ち着かせるのにかなり疲れたが、これでもう心残りは無かった。

そんなこんなで、最終日。

日曜日の空は透き通るような青空だった。

旅立つには、もってこいの天気だ。

持ち物は、一週間分の着替えが入ったキャリーケース、愛用のエレキギター、去年の誕生日に婆ちゃんからもらった調理器具一式とダンボール箱が十数箱。

不意に空間が割れ、隙間から紫が出てきた。

紫「後始末は終わったかしら？」

彩「まだ最後の用事が残ってるんだ。すぐに終わるから少し待っててくれないか？」

紫「わかったわ、後腐れの無いようにしておきなさい」

察してくれたのだろう、紫は快く承諾してくれた。

彩「ああ、あと待ってる間にこれ、あっちに運んでおいてくれないか？」

紫「あら、女性に力仕事をさせる気かしら？」

彩「見合った報酬は出せると思うぞ？」

紫は小さく息を吐き、

紫「分かったわ。報酬、期待してるから」

言うやいなやダンボールを全て隙間に落とした。
やっぱり便利だな。

彩「サンキュ、それとこっちの通貨ってあっちじゃ使えないよな？」

紫「当たり前じゃない、文明レベルが違うもの」

だよなあ、と預金について思案していると

紫「何なら、換金してあげましょうか？」

彩「マジで？ぜひそうしてくれ。あと、持ちきれない分は紫が預かっててくれ」

これで、金のほうは片付いた。あとは、

彩「じゃ、そろそろいつて来る。」

紫「ええ、いつてらっしゃい」

俺は、これが最初で最後になるであろうあいつの家へと向かった。

彩「ここか」

俺は、家から歩いて大体15分くらいのところにある神社に来ていた。

ここにあいつはいる。

あいつにだけは自分の口で別れを告げなければいけないような気がしてここに来ていた。

正直、会いたくない。

だけど、会わずに行ったら絶対後悔する。

そんな確信めいた、勘が働いていた。

両の頬を両手ではたき、腹をくくる。

あいつが居るであろう境内に向けて階段を登り出した。

あいつ、早苗は霊夢と同じような巫女服を着て境内の真ん中で掃除をしていた。

こちらに気づくと驚いた様子で掃除を中断し、こちらに駆け寄ってきた。

早「アヤじゃないですか、珍しいですね。それも、こんなに朝早くから神社に来るなんてやつとうちの信者になる気になったんですね」

いつもの調子で話しかけてくる早苗、しかしこちらの雰囲気が違うことに気づくと真面目な顔になった。

早「何か、大事な用があるみたいですね」

流石に何年も一緒に居ればそれくらいは分かるようになる。そのことに感謝しつつ、俺はいきなり本題に入った。

彩「今日は、お別れを言いに来た」

早「……………」

早苗は黙ってこちらを見ている。

詳細を話し終わるまで黙っているつもりだろう。

俺は全てを話した。

これから遠くで暮らすこと。

電気もまともにならないから連絡がつかないことなど簡潔に話した。

もちろん、幻想郷の部分やそれに関係するところは全て伏せたうえでだ。

全てを話し終わると早苗が口を開いた。

早「アヤにとって、そちらはそんなにも魅力的な場所だったのですか？」

その瞳は、嘘をつくこと許さない目だった。
だから俺は、まっすぐに見つめ返し

彩「ああ、最高の場所だった。すっげえワクワクしてる」

子供っぽい笑顔で返した。

早「なら、私から言うことはありません。あっちでも、元気でね」

そう言つて、早苗は笑っていた。

だから俺も、さっきとは違う笑顔で

彩「俺はどこでも元気だよ。早苗こそ俺が居なくなつてから泣くんだよ？」

早「その言葉、そっくりそのまま返してあげる。」

それから、お互いに笑いあった。

もう会えないかもしれないのに、二人はとても楽しげだった。

彩「それじゃ、そろそろいくよ。またな、早苗」

早「もう会えないかもしれないのに、別れの言葉がそれ？」

早苗は少し呆れていた。

彩「もしかしたら、またどこかで会えるかもしれないし、そっちの

ほうが楽しいだろ？」

早「それもそうね。じゃあ、またね」

彩「ああ、またな」

そう言つて、紫が待っているマンションへ走り出した。

紫「用事は済んだの？」

部屋に入ると同時に、紫が出てきた。

彩「ああ、これで思い残すことはない」

紫「さっきよりもいい顔をしてるわ。男の子の顔になっている」

それが本当なら、あいつに感謝しないとな。

今すぐにでも泣き出したいはずなのに、それをおくびにも出さず最後まで笑っていた強い少女に。

紫が幻想郷へと続く隙間を開いて一足先に入っていた。

俺は、もう何も無い部屋を振り返り

彩「俺も負けていられないな」

誰にも聞こえないようにポツリと言って隙間へ入った。

side 早苗

彼が帰ってから私は部屋に閉じこもった。

今は、誰にも会いたくなかった。

いや、違う。

一人だけ、あいつに会いたかった。

つい先ほどまで一緒に笑っていた、彼に。

早「危なかったな」

本当は途中で泣き出したかった。

泣くなよ？って言われたときは本当に危なかった。

彼の胸に飛び込んで、泣いてしまいたかった。

行かないで、そばに居てと言って引き止めてしまいたかった。

でも、私はそれをしないで笑って彼を送り出した。

上手く笑えていたかは分からない。

上手く笑えていても彼には無理をしているってバレているだろう。

分かるのだ。

あれだけ長い時間を一緒に居たから。

彼のことが好きか？と聞かれたら即答でYESと答えるだろう。

だがそこに恋愛感情があるかと言われれば微妙なところだ。

いつも一緒に当たり前になっていたから。

だから、本当は半身が切り裂かれる思いだったのだ。

それでも、泣かなかった自分を褒めてやりたい。

早「もう、泣いてもいいよね？」

瞬間、涙があふれてきた。

私は泣いた。

何が悲しくて泣くのか分からないまま泣いた。

だけど、泣いたままではいられない。

このままでは、彼に笑われてしまう。

私は、もうここには居ない彼に向けてつぶやいた。

早「ちゃんと・・・ヒック・・・立ち上がるから、前を向くから・・・
ふええ・・・だから・・・」

早「今はもう少しだけ、泣かせて・・・」

それから、泣き疲れて眠るまで私は泣いた。

別れ、そして旅立ち（後書き）

誰でも、親しい人との別れは辛いですね。

でも、それを乗り越えてこそ強くなれると思う。

誤字等、訂正箇所がありましたらおねがいします

修行という名の・・・無茶振り？（前書き）

やっと、研修が終わった。
今日から投稿再開です。
それではござー。

修行という名の・・・無茶振り？

side 彩人

博麗神社の境内、突如として空間に亀裂がはしる。

いわゆるスキマである。

それは、音もなく広がっていき中からはこのスキマを作り出した張本人である八雲紫が出てくる。

ついで、元いた世界から幻想郷へと移り住む少年、狂咲彩人が出てきた。

外、現代での後始末を終え、紫と共に幻想郷へと帰ってきたのだ。

彩「ここは、博麗神社か？」

紫「そうよ、今日からここで修行するのよ。まさか忘れたの？」

彩「いや、覚えてるよ。で、具体的にはなにをするんだ？」

ここで生きていくためには弾幕を打てること、空を飛ぶことが必須になってくる。

人里で生活する分には必要ないのだが、できて損はないのでこちらとしてもありがたい。

それに空を自由に飛ぶって全人類の夢だし。

紫「それを教えるのは私の役目じゃないわ。じゃ、私は帰って寝るから後は霊夢に聞いて」

そう言って、スキマへと入っていく。

その姿を見送りながら俺はお礼を言った。

彩「紫、いろいろとありがとな。それから、俺をここに連れてきてくれてありがとう!」

自分が今できる最高の笑顔を紫に向けた。

紫は胡散臭い笑みではなく見た目相応の美しい笑顔で、

紫「どういたしまして。それと、幻想郷へようこそ。」

そう言つて、スキマは閉じられた。

と思つたら、再度開き上半身だけ紫が出てきた。

紫「そうそう、今日は宴会ね。私の家族も連れてくるから。報酬、楽しみにしてるわよ?」

そう言つて今度こそ帰つていった。

彩「さて、霊夢はどこに居るかな?」

俺は、修行を手伝ってもらうべく霊夢を探した。

霊夢と魔理沙は縁側でお茶を飲んでいた。

彩「ただいま、霊夢に魔理沙。」

霊夢たちのところに行き、帰ってきたことを告げる。

霊「あら、お帰りなさい。いつ帰ってきたの?」

彩「ついさっきだ。ルーミアは?」

魔「あいつなら、お前が後片付けに行ったあとすぐにフラフラとどっかに飛んで行ったぜ」

と、魔理沙が答える。

まあ妖怪だし、だいじょぶかと納得していると霊夢が口を開いた。

霊「彩人は今日からここに住むわけだけど、部屋は客間が開いているからそこ使って。あと、分かっているとっくろ家事は当番制だからね」

と、俺の部屋のことと家事について提示してきた。

まあ、居候の身だし家事は得意中の得意だから文句ないけどね。

彩「ああ、分かった。じゃ、早速だけど空の飛び方から教えてくれ」

と、修行に入ろうとする。

実はさっきから早く空を飛べるようになりたくてうずうずしてたのだ。

それが伝わったのか、霊夢はクスツと笑いながら

霊「その前にこの幻想郷のことでスペルカードルールについて説明するわ」

確かに、この幻想郷で生きていくのだからこのことはよく知っておかなければならない。

それにチルノが使ってたカードみたいなもの（あれがスペルカードなのだろう）にも興味があつたので特に反論もなかった。

彩「分かった。それじゃあ教えてくれ」

少女説明中・・・
少年静聴中・・・

霊「と、まあこんなかんじね」

要訳すると幻想郷は、人間、妖怪、妖精、神が種族に関係なく存在している世界らしい。

妖怪は人を襲い、人間は妖怪を退治するのが普通だ。

しかし、幻想郷では人間に友好的な妖怪も数多く存在する。

そうすると、人は妖怪を恐れなくなり、妖怪が存在できなくなってしまう。

妖怪とは、人の恐れから生まれたものだからだ。

また、妖怪のほうが比率が多らしく力の強い妖怪は暇を持て余しやすくなるのだそうだ。

そこで、考え出されたのがスペルカードルールだ。

これは、スペルカードに自分の技などを込め必殺技のようにしたものである。

そして、互いに弾幕を打ち合い美しさを競うのが弾幕ごっこである。これにより妖怪たちは暇を持て余すことが少なくなっただけらしい。

さらに、力の強い妖怪と人間が対等に渡り合うことができるようにする狙いもあるらしい。

欠点といえば争いが起こりやすくなったことだろうか。

ちなみに死ぬことはないが不慮の事故というのはあるみたいだ。

彩「なるほどな、すつごく楽しそうな世界だってことが分かった」

その答えに少々呆れたようだが霊夢はおもむろに立ち上がった。

霊「まったく、そろそろ弾幕の撃ち方と空の飛び方でも教えましょうか？」

魔理沙と俺は待つてましたと言わんばかりに立ち上がり、境内に出た。

霊「さて、まずは空の飛び方だけど・・・」

霊夢はいきなり困った顔をした。
どうしたのか、と聞くと

霊「いや、教えるって言っても私が飛べるのは【空を飛ぶ程度の能力】のおかげだからどうしたらいいのか分かんない」

いきなり手詰まりである。

魔理沙は笑っているし。

霊「と、とにかく自分が飛ぶようなイメージを思い浮かべてみなさい！私の勘がそうしろって告げているわ」

魔理沙に笑われ、少しむくれている霊夢に苦笑しつつ言われたとおりにやってみた。
すると、

彩「浮いた！？」

自分のイメージど通りに体が宙に浮いていた。

霊「ほら見なさい！」

と、霊夢が胸を張る。

いろいろと試してみたが、どうやらイメージが明確にできるから成功したみたいだ。

浮くまでが大変らしく、空中で動くことはそれほど難しくはないみたいだ。

あとは、飛んで体に覚えさせるしかないらしい。

ちなみに、浮いたからテンションが揚がりすぎて30分ほど飛び回ったところで霊夢から止められた。

霊「さて、飛ぶことができたから次は弾幕ね。私みたいにお札に靈力を込めて放つてもいいし、魔理沙みたいにマジックアイテムを媒体にしてもいいし、靈力や魔力を弾の形にして放つてもいいわよ」

そついうと、霊夢と魔理沙がお互いに撃ち合って見本を見せてくれた。

考えた結果、好きな形で撃てるので靈力や魔力を弾幕にして撃つことにした。

彩「で、どうやって撃つんだ？」

魔「靈力や魔力を弾になって放つイメージで念じればいいんだぜ」

言われたとおりをやってみる。

前方5方向に丸い形の弾幕を1方向あたり50発ほど放つイメージで力を練る。

今回は靈力で撃ってみる。

イメージはできた、あとは力を放出するだけ。

ドドドドドドッ！！

イメージ通りの弾幕が出た。

彩「おおっ！できた！なあ霊夢、魔理沙、こんな感じでいいんだよね？」

弹幕がイメージどおりに出せたので興奮していると、

霊「まさか、たった数十分で撃てるようになるなんて」

魔「本当に外から来たのか疑いたくなるな」

二人は、はしゃいでいる彩人を見ながら呆れていた。

そろそろ、お昼の時間なので修行は中断し昼食を摂った。

昼食は霊夢が作ってくれた。

夜は俺らしい。

昼食後、俺は白紙のスペルカードを前にしてスペルの作成に勤しんでいた。

彩「避けづらいものにしようとしたら、やっぱり大量にそれでいてランダムにばら撒くようにすればいいけどそれだと綺麗じゃないな・・・」

というろ、考えた結果何とか二枚作ることができた。

魔「おおっ？できたのか？」

彩「まあ、とりあえず二枚できたよ」

魔理沙が様子を見に来たのでとりあえず完成したことを伝えると、

とんでもない事を言い出した。

魔「よし、それじゃあ弾幕ごっこしようぜ」

彩「は？ナニッテンノ？」

思わず字がカタカナになってしまいうくらい意味不明だった。

俺が、魔理沙と、弾幕ごっこ？ハハハッ、いくらなんでも勝てるわけねーじゃん。

ああ、目がやる気満々だよこの子。

魔「手っ取り早く弾幕と空を飛ぶのに慣れるには実践が一番だぜ」

嘘だ、絶対面白がつて言つてやがる。

どうやら、拒否権は無いみたいなのでため息をついて縁側から外に出た。

霊夢はちゃっかりお茶とせんべいを出して傍観者を決め込んでるし。ある程度の高度まで上昇し、魔理沙がルールを言い出した。

魔「使用スペカは二枚、相手が降参あるいは戦闘不能になったら終了だぜ」

彩「ハア、手加減してくれよ」

魔「そいつは無理だぜッ！！」

その言葉を合図に弾幕ごっこが始まった。

俺は、適当に魔理沙に向けて弾幕をばら撒いた。

魔「そんなんじゃ、当たらないぜ」

そりゃそうだ、当てるつもりなんてないからな。
これはいわば様子見、魔理沙は油断してるからそこを上手く突かないとこちらに勝機は無い。

魔「今度はこっちから行くぜ」

星型の弾幕がこちらに向かってくる。

が、全ての軌道で飛んでくるか分かる。

どうやらチルノとの一戦で弾幕の流れが読めるようになったらしい。
弾幕が通らないところは簡単に分かるがわざと大きく避ける。

最小の動きで弾幕をかわし続けたら魔理沙も警戒するだろうしな。
だからわざと大げさに避ける。

魔「なかなかやるな。じゃ、そろそろ使わせてもらっぜ」

魔理沙がスペカを構え宣言する。

魔「魔符『スターダストレヴアリエ』」

瞬間、大量の星屑が周囲に撒き散らされる。

大きさは小ささまで、軌道が分かっているにも飛ぶのに慣れていないため回避に限界がある。

仕方が無い、使うか。

彩「流星『スターダスト・レイン』」

上空から大量の星型弾幕が広範囲に落ちてくる。

それは魔理沙の弾幕を次々と相殺し魔理沙目掛けて落ちてゆく。

魔「なっ！わっ！わわっ！」

何とかかわしていくがあのままじゃそのうち被弾するだろう。
だがまだ油断はできない。

どちらもスペカがあと一枚残っているのだ。

ここで一気に決めたいところだが経験の少ない中で先に手札を切る
のは得策ではない。

魔「ちいつ、これでまとめて吹き飛ばしてやるぜ」

魔理沙がスペカを構えた。

俺もスペカを構える。

そして、同時に叫んだ。

魔「恋符『マスタースパーク』」

彩「狂咲『桜花爛漫』」

魔理沙が小さな箱のようなもの、八卦炉って言ったか？を構えた。
そこから、極太のレーザーが放たれる。

対して、こちらは桜の花びらを象った無数の弾幕、それこそ視界が
花びらで埋まるほどに大量の弾幕が広範囲に展開される。

この花びら一枚一枚に霊力または魔力を込めているので、当たり判
定があるからまず避けきる事など不可能だ。

その分燃費がものすごく悪いけど。

魔理沙のレーザーと俺の桜吹雪がぶつかり合う。

双方互角で拮抗していたが、徐々にこちらが押され始める。

魔理沙はあのレーザーを維持するために動けないはず。

対して、こちらは動ける。

なら取るべき行動はひとつ。

魔「まとめて、吹き飛ばえええええええ！」

魔理沙がさらに火力を上げ、ついに桜吹雪に風穴が開き霧散していく。

そこに彩人の姿は無かった。

魔「ぜえ、ぜえ。や、やりすぎちまったか？」

魔理沙は息切れを起こしながらも彩人の姿を探した。

彩「まったくやりすぎだ。初心者相手になんつつもんぶつ放すんだよ」

魔「!!!」

俺は魔理沙の背後にまわって弾幕を形成したまま話す。

彩「これで、チェック・メイトだな？魔理沙」

勝ったことが何よりうれしくて自然と笑みがこぼれる。

魔「まいったな、降参だぜ」

魔理沙は両手を挙げて負けを認めた。

「霊 お疲れ様。魔理沙に勝つなんてやるじゃない」

縁側まで降りていくと、霊夢が賞賛の言葉をくれた。

彩「サンキュ。でも、実力で勝ったわけじゃないし。何より、魔理沙が油断してたから勝てたんだよ」

魔「くそー、まさか負けるなんて思ってもみなかったぜ」

俺は霊夢の言葉に苦笑し、魔理沙は悔しがっている。

彩「さて、そろそろ夕飯の用意でもするか」

霊「えっ？もう？早くないかしら？」

現在時刻は4時を少し過ぎたあたり、初夏で夕飯の準備にしては早すぎる時間帯である。

彩「今日は、紫と紫の家族も来るからな。あと、荷物を運んでくれた礼をするって約束したから豪勢にいきたいんだ。それに・・・」

と言いかけて、台所へ行こうとし

彩「ルーミアも来そうだしな。ま、ちょっとした宴会になるんじゃないか？」

そう言い台所へ向かう。

その背中に霊夢と魔理沙は、

霊「そこまで言うんなら・・・」

霊・魔「期待してるわよ（ぜ）！ー！ー」

声をそろえて、期待してきた。
仲良いなと思いつながら、

彩「期待された！」

おどけた調子で答えた。

修行という名の・・・無茶振り？（後書き）

弾幕ごっこが上手く表現できない・・・orz

再会、そして宴会へ（前書き）

今回は、宴会が始まるまで、です。

ネタはあるのに、それを表現できるくらいの文才がほしいっっ！！
！

再会、そして宴会へ

side 彩人

俺は今台所に居る。

今晚の宴会に出すための料理を今から作るころだ。
が、ひとつ不安要素がある。

彩「釜戸・・・だど？」

そう、釜戸だ。

確かに紫は文明レベルが違うとは言っていたが、釜戸か。
できないことは無い、釜戸の使い方も婆ちゃんに教わった。
だが、使い方を知っているのと上手くできるかは別問題だ。

彩「ま、成るようになるっしょ」

こうして考えていても始まらない。

なら前に進んだほうが何倍もマシだ。

上手くできるかはわからない。

分からないからこそ、やってみる価値がある。

失敗したとしても他の料理でどうにかする方法もあるし、幸い食材はたくさんある。

彩「さて、と」

小学生のときに作った黒地に龍が描かれているエプロンを着け、頭
には百均でもよく見かけるバンダナ（色は赤）を巻く。

婆ちゃんにもらった調理器具一式の中の愛用の包丁（日本刀を作ってる人に特別に作って貰ったものらしい）を構える。
準備万端、いつでも始められる。

彩「これより、調理を開始する」

俺は、料理を作り始めた。

side 魔理沙

私は、宴会まで暇だったので彩人が作っている料理をつまみ食いしようとして台所までやってきていた。

魔「あれだけ自信満々で言われたら誰だって気になるってもんだぜ」

自分たちの前で堂々と言いつつ切ったのだからそれなりの腕なのは伺える。

だからこそ、どれほどなのか一足先に知りたくなったのだ。

魔「彩人が気になるような言い方をするからいけないんだ。だから私は悪くないんだぜ」

自分の行動を正当化しつつ台所に着いたので中を覗いてみる。
中では、信じられないことが起きていた。

彩人は、パツと見5人分の作業を一人でこなしていた。
その動きには無駄がない。

食材を切り、釜戸の火加減を見る。

味付けをし、切った食材を炒め始める。

できた料理を器に盛り付け、空いた食器や鍋を洗っていく。
このような作業を全部一人で捌いているのだ。

魔「これは、すごいでしょ。」

私は、しばし調理の様子に見とれていた。

彩「ん？魔理沙か、どした？」

彩人がこちらに気づいた。

いきなり声を掛けられて驚きつつ、なんとかごまかす。

魔「えっ、いや、な、何でもないんだぜ。」

あはは〜と目が泳ぐ。

彩人は何かに気づいたらしく、悪戯っぽく笑うと、

彩「つまみ食いに来たんだろ？」

魔「なっ！！」

図星を指されて頬が少し赤くなった。

彩「その反応は、どうやら図星みたいだな」

と、からから笑う。

なんとか反論しようかとあれこれ考えていると、彩人が

彩「魔理沙、味見してくれないか？」

と、言ってきた。

つまみ食いに来たのにあちらのほうから食べてくれと言ってきたのだ。

やっぱり面白い奴だなと思い、せっかくの誘いなので

魔「それじゃ、この魔理沙様が味見をしてやるからありがたく思うんだぜ」

彩人は煮物を小皿に乗せて持ってきた。

彩「筑前煮って言うんだけど気に入るかな？」

と言い、煮物を箸で持ち上げ口元まで持ってきた。

彩「はい、あ〜ん」

私の思考は停止した。

これは、いわゆる『あ〜ん』ってやつだ。

あの、仲のいい男女がやるっていう。

って言うか今言ってたし。

私がフリーズしていると、

彩「どうしたの？冷めないうちに食べなよ」

彩人がニヤニヤ笑いながら言ってきた。

絶対分かっててやってるな。

仕方ない、少し恥ずかしいけど食べると言ってしまった以上食べるしかない。

私がそう決心した時、

霊「あら、おいしそ。」

パクツと横から霊夢に食べられてしまった。

霊「！！！！ッ、すごいおいしい！！」

霊夢が目に見えて分かるくらいに驚いている。

文字通りほっぺが落ちそうなくらい頬が緩んでいるし。

彩「どうやら口にあったようだね」

彩人はうれしそうに笑って調理を再開した。

霊「こんなに上手なら、毎日作ってもらおうかしら？」

霊夢は今朝の当番製という言葉を早くも撤廃しようか本気で考えている。

魔「れゝいゝむゝゝ」

霊「あら魔理沙、まだいたの？邪魔になるから縁側でお茶でも飲んで待ってましょ」

この巫女は悪びれる様子も無く縁側に戻っていく。

魔「私の煮物・・・」

霊「ああ、あれ？とってもおいしかったわよ」

霊夢は満面の笑顔を咲かせる。
その笑顔に腹が立ったので、

魔「霊夢、弾幕ごっこで勝負だ。食べ物への恨みは怖いんだぜ」

霊「いいわよ、今は気分がいいから相手してあげる」

私は霊夢に恨みをぶつけるべく空へと舞い上がった。

side 彩人

霊夢と魔理沙が弾幕ごっこを始めてから数刻、だいたい料理が作り終わった。

作ったものは、枝豆や焼き鳥、焼き魚各種、シーザーサラダや揚げ物、etc...とにかくつまみはいろいろ作った。

あと、ご飯ものでいなり寿司なんかも作った。

何故かって？好きなんだよ、悪いか？

あとはお酒をいろいろ出して、料理を並べて準備オツケー。

霊夢たちも終わったようで、空から降りてきた。

霊「あら、準備が終わったのね？」

彩「ああ、お二人さんがじゃれあっている間にね」

魔「おおっ！すごいな。これ全部彩人が作ったのか？」

霊夢も魔理沙も降りてきて早々、早く食べたいのかそわそわしている。

彩「そろそろ、来る頃だと思うけど・・・来たな」

空間に亀裂が走り、中から紫が出てきた。

紫「こんばんは、報酬を受け取りに来たわ」

紫はいつもと同じ胡散臭く笑いながら言った。

彩「チャオ、今夜は騒がしい夜になりそうだ」

対して、俺はどこか遠くを見つめながら返した。

紫「さて、私の家族を紹介するわ。二人とも出ていらっしやい」

そう言つて、紫がスキマを開く。

中からは、見事な9本の尻尾を生やした紫に負けず劣らずの美人さんが出てきた。

藍「はじめまして、私は紫様の式の八雲藍だ。」

藍と名乗った少女はこちらに手を差し伸べてきた。

彩「俺は狂咲彩人。よろしくな、藍さん」

俺は、差し伸べられた手をしっかりと掴み返した。

藍「よろしく。あと私のことは藍でかまわない、私も彩人と呼ばせ

てもらう。敬語も無しだぞ」

そう言っただけは明らかに笑った。
紫と違って、胡散臭さは微塵もない笑顔だった。

藍「さ、橙。お前も挨拶なさい」

そう言った藍の後ろからは二本の尻尾を生やした猫耳の女の子が出てきた。

その耳には金の輪っかを着けていて頭には緑の帽子を被っている。

その少女はもじもじしながら俯いて時折こちらをチラッと見てくる。

藍「ほら、恥ずかしがってないで挨拶は？」

藍が優しく催促する。

が、少女の反応は変わらない。

藍は困惑しているようで、心配そうに見ている。

ということは、普段と違う反応をしているということだ。

つかこの子って、もしかして。

そう思い立った俺は少女の目線の高さに合わせ、頭を撫でながら言った。

彩「道を教えてくれてありがとね。おかげで無事にたどり着けたよ」

そうだった瞬間、少女が驚いたようにこちらを見る。

どうやら正解だったようだ、そしてやっと目線が交差した。

彩「俺は、狂咲彩人。君の名前を覚えてくれるかな？」

俺は、あの時と同じ声音で少女に聞いた。

橙「あ・・・ちえ、橙っていいいます。藍しゃまの式です!」

その答えに満足し、改めてお礼を言った。

彩「そつか。橙、改めてありがとな。おかげで迷わずにすんだよ」

穏やかに微笑みながら頭を撫でる。

橙「い、いえ。お役に立てたのならよかったです／＼」

そう言つて頬を朱に染めて俯いてしまった。

橙「あの、どうしてわかつたんですか？」

橙は、不思議そうに聞いてきた。

彩「確信があつたわけじゃないよ。ただ、あのときの黒猫に雰囲気
が似てたから、もしかしたらとおもつてね」

そう言つて、橙の頭を撫でた。

橙は恥ずかしいのか、また俯いて藍の後ろに隠れてしまった。

紫「橙と知り合ひだったのね」

紫が意外そうな顔で聞いてきた。

彩「ああ、博麗神社への道を教えてもらつたんだ。」

紫「そう。橙、ご苦労様」

紫が橙の頭を撫で、橙は気持ちよさそうに目を細めた。

彩「さて、料理のほうはできているから案内するよ」

そう言つて紫たちを案内しようとしたとき、

？「・・・・・・・・・・・・・・・・」

橙「あれ？今何か聞こえませんでしたか？」

橙が耳をピクピクさせながら言った。

？「・・・・・・・・・・おおお！」

藍「確かに聞こえるな。誰かを呼んでいるみたいだ」

藍にも聞こえたようだ。

どうやら獣耳の二人は聴覚がかなり優れているらしく、二人で耳をピクピクさせている。

その声はだんだんと近づいてくる。

？「あーいやー・・・・・・・・おおおお！」

彩「この声は・・・・・・・・！」

自分にも聞こえるくらい近づいてきた声は聞き覚えのあるもので、

ル「あーいやーとー！！！」

ズドッ！！！

という音ともに金髪の少女、ルーミアが抱きついてきた。外見は少女でも中身は妖怪、人間である自分には車が衝突したのと同じくらいの衝撃が走った。

流石にまともに受け止められないので、能力で流れを読んでそれに合わせて後ろに跳び衝撃を1/10くらいまで軽減した。

集中しないとまともに読めないレベルでまだまだ使いこなせていない。

軽減しても軽く2、3回バウンドしたしね。

ルーミア、次はもう少し加減してくれ。

胸に顔をうずめて抱きついていている少女の頭をポンポンでなでしながら

彩「ただいま、ルーミア」

ル「おかえり！！彩人」

そう言ってお互いに笑い合う。

ルーミアはそのまま首に手を廻し自分の頬を俺の頬に押し付けてきた。

ムニムニとした感触が気持ちいいが、力の入り具合から満足するまで離れてくれそうもないので、ルーミアを抱っこし今度こそ霊夢と魔理沙のいる居間へと向かった。

その途中、紫が

紫「貴方たち仲良いわね」

と言ってきた。

まあ、確かに傍から見れば仲の良い兄妹に見えるかもしれない、実際俺はルーミアのことが気に入っているし。

が、ルーミアがどう思っているかまでは分からない。
だから、自分に抱きついていているルーミアに聞いてみた。

彩「ルーミア、俺のことどう思ってる？」

ル「お兄ちゃんみたいで大好き！！」

満面の笑顔で即答した。

彩「ありがと、俺もルーミアのこと大好きだよ」

その答えにうれしさと恥ずかしさを感じつつ愛しいものを扱うように抱えなおした。

彩「というわけで、俺もルーミアもお互いが大好きって事が分かったぞ、紫」

別に聞かなくても今までの行動から十分すぎるほどに分かることだ
があえて言葉にしたかった。
そういう気分だったのだ。

紫「やっぱり貴方を選んで正解だったわ」

そう言っただけで紫は笑った。

その顔にいつもの胡散臭さは無く、見た目相応の綺麗な笑顔だった。
紫の笑顔で藍と橙もうれしそうに笑った。

霊「あつ！やっと来たのね。もう、せっかくの料理が冷めちゃうじゃない」

話しているうちに居間についたようだ。

霊夢と魔理沙は人数分のお椀と箸を準備して待っていた。

彩「ごめんごめん。さ、全員そろったことだし始めますか？」

そういつて各々席に着く。

ちなみに、俺↓ルーミア↓霊夢↓魔理沙↓紫↓藍↓橙の順番でテーブルを囲んでいる。ルーミアは俺の膝の上ね。

紫「それじゃ、私が乾杯の音頭を取るわ」

なんか、さっきまで無かったはずのお酒が入ったコップが置かれているし、皆平然とコップ持ってるし。

紫「彩人が幻想郷の住人になったことを祝して乾杯！！」

彩・霊・魔・藍・橙・ル「「「「「乾杯！」「」「」「」

こうして小さな宴会が始まった。

再会、そして宴会へ（後書き）

なかなか話が進まない。

100話超してる先人たちはすごいっすね！

感想・誤字指摘待ってます。

一気飲み、ダメ、絶対（前書き）

今回は、短いです。

お酒はアルコール度数20から（嘘）

それでは、どぞー

一気飲み、ダメ、絶対

side 彩人

ル・橙「いただきます」

乾杯の声のすぐ後、橙とルーミアは手近にある料理に箸を伸ばした。橙は焼き魚、ルーミアは筑前煮を選んだようだ。

ル「おいしー！ー！」

相当気に入ったらしく、あっという間に一皿空けてしまった。

彩「気に入ってくれたかな？」

ル「うん、今まで食べた物の中で一番おいしい！」

彩「ありがと。たくさんあるからいっぱい食べてね」

ルーミアは大きく頷くと、今度は蒸した鶏肉とトマトのサラダ、レモンとバジルのドレッシングがけを食べ始めた。

橙の方を見ると、どうやら上手く魚の骨が取れないようだ。

彩「橙、まずは背中に沿って箸で切れ目を入れるんだ。そうすると上の部分は骨が少なくて食べやすくなるよ。上を食べたら今度は・・・」

見かねたので一通りの食べ方の見本を見せた。

焼き魚が数分で骨と身とはらわたに分けられる。
それを見た橙は、

橙「うわゝ、すごい。私もできるようになれるかな？」

とても感動した様子で目をキラキラさせながら聞いてきた。

彩「練習すればきっとできるよ。ほら、俺の分も食べな」

そう言つて、自分の分も差し出す。

橙はお礼を言つて早速綺麗に骨を抜いた身を口に入れる。

橙「んゝゝおいしゝゝっ！」

やはり猫だけに魚系は大好物のようだ。

あつという間にあげた分を食べ終え、自分の魚の骨を取りにかかる。

二人には自分が作った料理は口にあったみたいだ。

問題は紫の方、自信はあるがやはり不安もある。

俺は、紫の方を向き

彩「紫、労働に見合つた報酬にはなりえるかな？」

きんぴらごぼうをつついてる紫に聞いてみた。

紫は何も言わずただ咀嚼し、そして飲み込んだ。

紫「正直予想以上よ。これなら、お釣りを出してもいいくらいだわ」

どうやら、心配する必要は無かつたみたいだ。

これだけ喜んでもらえたのなら料理人冥利に尽きるというものだ。
料理人じゃないけど。

霊「あつ！魔理沙それあたしのおでん、返しなさいよ」

魔「へへ〜んだ、昼間のお返しだぜ」

向こうでは霊夢と魔理沙が互いの料理を奪いあっている。

いっぱい作ったから、盗り合わなくてもいいのに。といっても無駄なので放置しておく。

彩「さて、俺も食べようかな。いなりはどこだ？」

いなり寿司を探すが見当たらない。

おかしいな、山になるように積んだからすぐに見つかると思ったんだけど、と思っていたらあった。

あったはいいが、多めに作ったはずのいなり寿司が1/2ほどになっ
っていた。

えっ？まだ30分も経ってないのにもう無え。

どうやら、そのうちの半分は藍が食べたようだ。

彩「藍もいなり寿司が好きなの？」

藍「ああ、というより油揚げが好きなんだ。も？ってことは彩人もか？」

彩「ああ、大好きだ。一番作った回数が多いかもな」

藍「そうなのか、よければ今度教えてくれないか？私も作れるがこ
こまでのものは、なかなかできないからな」

彩「じゃあ、今度一緒に作ろうぜ」

藍「わかった、約束だぞ」

藍はうれしそうに笑ったが頬にご飯粒が付いていた。

彩「藍、動かないで」

そう言っつて、藍の顔に手を伸ばす。

頬についたご飯粒を取りそのまま自分の口へと運んだ。

彩「うん、これきれいになったな」

藍は呆然としていたが、ハッと我に返ると顔を赤くしながら抗議してきた。

藍「い、いきなり何をするんだ／＼」

彩「えっ？ご飯粒とつてあげただけだけど？」

藍「いや、そうじゃなくて・・・」

動揺しているのか上手く頭が回らないようで頭を抱えている。

その反応が面白かったので少しニヤニヤしながら追い討ちを掛けてみた。

彩「藍ってなかなか可愛いところがあるんだな」

藍「なッなな何言っているんだお前は／＼」

今度は先程よりも赤く染まった頬を押さえながら目をそらす。

藍「お前、結構イジワルなんだな」

彩「ごめんごめん、機嫌直してくれよ」

彩「でも藍が可愛いつてのはホントだぞ？」

そう言ったらまた顔を赤くした。

しばらくはそんな感じに盛り上がっていた。

だが、どこの宴会でも中盤に差し掛かると執拗に絡みだす奴は必ず居る。

魔「いようう、彩人ゝ飲んでるか？」

彩「また分かりやすい酔い方してんな。霊夢はどした？」

魔「外に涼みにいつてるぜ。それよりも何で飲まないんだ？」

魔理沙が肩を組んでくる。

いちいち酔っ払いのテンプレ的セリフを吐いてくる。正直うぜえ。

ちなみに、俺は未成年だが適度な飲酒は体にいいと婆ちゃんに言われ15歳頃から呑んでいるので問題ない。

彩「ちゃんと、呑んでるよ。適度にな」

別に弱いわけじゃない。むしろ強い方だと自覚もある。

ただ、後片付けを誰がやるか考えれば分かるだろ？

魔「そんなんじゃないだめだぜ。私が酌してやるから飲め呑め」

彩「いやだから、俺はッ!?!」

ガシツと後ろから羽交い絞めされた。

霊「ほらほら、あんたも飲みなさいよ」

にはははと霊夢が笑う。

この二人、絶対悪酔いしてるよ。
目が据わってるもん。

紫と藍は外で月見酒と洒落込んでるし、ルーミアと橙は寝てるし、あれ? 詰んだ?

魔「よし、一気飲み挑戦だ」

そう言つて魔理沙が取り出したのは40度はあるバーボン。
は?それを一気飲みしろと?無理無理、明日が恐ーよ。

彩「ま、魔理沙とりあえず落ちつ・・・ツムグウ」

酒が一気に胃の中へと下る。

さすがに一気飲みするような酒ではないのでだんだんと意識が遠退いて来た。

霊夢、魔理沙後で覚えておけよ。

そして、意識が完全に暗闇へと沈んだ。

一気飲み、ダメ、絶対（後書き）

お酒は20歳になってからですよ。

あと、一気飲みは下手すると死んでしまうので絶対にやらないで下さい。

感想・誤字訂正まっています。

夢の中での約束 dream side (前書き)

最近閲覧してくれる人が増えてきました。
うれしいです。

それではどぞー

夢の中での約束 } dream side }

side } 彩人 }

彩「んあ？どこだここ？」

目を開けると、何時の間にやら真っ白い空間に突っ立っていた。さつきまで宴会をしていたはずだが、記憶を探るとさつきの出来事が思い出される。

彩「たしか、酔った霊夢と魔理沙に無理矢理酒を流し込まれてそれで・・・気絶したのか」

酔った感覚は無いが頭痛がしてくるような気がする。

起きたら確実に二日酔いだ。それも強烈なやつ。

あいつら、絶対覚えてるよ。

起きたときのことはそのとき考えるとして今は目の前の事に頭を切り替える。

彩「この空間は前と同じものか？確か前は・・・ツツツ！！？！？」

瞬間、背中にものすごい衝撃が走った。

不意だったので受身を取ることもできず、イチローのレーザービームも真っ青な感じで吹っ飛んでいく。

何メートル跳んだかも分からなくなるくらいの距離を跳び、最後に思いつきり滑ってようやく静止した。

これが夢の中じゃなかったらぶつかった時に四肢がもげてたな、と笑えないことを考えながら立ち上がり後ろを向く。

綺麗な虹色の飾りがついた羽のようなものが見え、それがパタパタと動いている。

それだけで、何が起きたか理解できた。

俺は何とか立ち上がって、体に巻きついていて腕を優しく解き少女へと向き直った。

少女は俯いていて、その表情は見えない。だけど、背中の羽を見れば十分だ。

彩「よう、フラン。いい子にしてたか？」

俺はフランに話しかけた。

だが、フランは黙っている。

どうしたの？と聞こうとしたら、不意にフランが口を開いた。

フ「彩人だよね？」

彩「ああ、そうだぜ」

フ「ホントに彩人なんだよね？」

彩「ホントに、彩人だよ」

フランはまだ俯いていた。

背中の羽はだんだんと落ち着いてきて、今は止まっている。

フランは一步一步ゆっくりと近づいてきた。そして・・・

フ「彩人、会いたかった！」

目尻に涙を溜め、抱きついてくる小さな身体。

彩「俺も会いたかったよ、フラン」

それを柔らかく受け止め、頭を撫でる。

フ「ねえ彩人、私ね力を上手くコントロールできるように練習してるんだよ」

彩「そうなのか？それなら俺と同じだな」

フ「彩人も？」

彩「俺も弾幕の打ち方とか空の飛び方、能力の使い方を練習してるんだよ」

フ「そうなんだ、じゃあ一緒に頑張ろうね！」

彩「そうだな、夢の中なら限界も無いだろうしな」

俺とフランは夢の中で一緒に修行する約束をした。

夢の中で修行することで二人とも完璧に力を扱えるようになるのだがそれはまだ先の話である。

それからまた二人でお話をした。

互いに住んでいる場所や最近の出来事などを話した。

フ「ねえ、彩人には兄弟って居る？」

フランが唐突に聞いてきた。

その表情はどこか寂しそうな、悲しそうな顔をしている。

彩「俺には居ないな。フランには、兄弟いるのか？」

フ「お姉さまが一人いるよ、紅魔館の主で私の唯一の肉親。でも・・
」

そのままフランは俯いてしまった。

俺は先を促さずフランがしゃべりだすのをじっと待った。

フ「お姉さまはきっと私のことが嫌いなんだ」

フランの声は震えていた。

ギュツと服を握る手に力がこもる。

彩「どうしてそう思うんだ？」

俺は優しく聞いた。

だいたい理由は予測できるがあくまで予測だ。

フランの口から聞くまではなんとも言えない。

フ「だって、私を地下室に閉じ込めたのはお姉さまだから」

やっぱりな、唯一の肉親に拒絶とも取れる行為をされたら誰だって
そう思う。

でも、

彩「それは、本人の口から直接聞いたのか？」

フ「聞いてないよ、聞けるわけないもの。だって、お姉さまは私に
会いに来てくれないッ！！」

とうとう、フランの頬に雫が流れ始めた。

フ「どうして、どうしてお姉さまは私に会いに来てくれないの？私、ずっと待ってるのにッ！」

フランの感情が爆発している。

水を溜めたダムが決壊したように感情の本流が止め処なく溢れる。

フ「ずっと、ずっとずっと、いつか来てくれるのを信じて待ってるのに・・・」

フ「どうして来てくれないの？」

俺は黙って聞いていた。

確かに胸糞悪い話だ。腸が煮えくり返るほどに。

恨まれても文句は言えない。それだけのことをしている。

彩「フランは、姉ちゃんのことを嫌いか？」

その問いかけにフランは驚いたように顔を上げた。

驚いたからか涙まで止まっている。

ちよっと意地悪なこと聞いたかな？と思いつつも

彩「フランは、姉ちゃんのこと本当は大好きなんだろ？大好きなんだけどそれを伝える機会が無いからどうしたらいいか分からない」

フランの頭を撫でながら続ける。

彩「別に地下室に閉じ込められていることについてもそこまで怒っている訳じゃない、自分を拒絶しているわけじゃなくて本当は守ってくれているって分かっているから」

彩「だけど、もっと姉ちゃんと仲良くしたい、一緒に居たいけどそれができないから拗ねてるだけなんだよな？」

フランはポカンと口を開けて固まっている。
ようやく搾り出した一言が

フ「どうして・・・？」

だった。その一言には全ての疑問が含まれている。
だから、一つ一つ答えた。

彩「だって、兄弟姉妹を本気で恨めるわけない、ましてやフランは優しいからな、姉を本気で恨むなんてできない」

彩「姉が館の主って立場を考えたら力の使い方が分からないフランを自由にさせておくわけ無い、体裁があるだろうし」

そして最後に

彩「なにより、フランが俺に甘えてくるのは姉に甘えられない反動つてのもあるんだろ？」

悪戯を思いついたような顔でフランに問いかける。

フランの顔が朱に染まり、顔を隠すように抱きついてきた。

フ「まだ知りあってから2回目なのに私のこと見てくれてたんだ？」

確かに、フランと触れ合った時間はかなり短い。

彩「時間なんて関係ないよ。そいつのことを本気で知ろうとすれば30分でもかなり分かるよ」

フランはうれしそうに笑い、ぎゅーっとしてきたのでお返しとばかりにこちらもぎゅーっとお返しした。
そして、一つ提案をした。

彩「なあフラン、俺が迎えに行ったらさ、姉ちゃんに自分の気持ちを伝えてみないか？俺も一緒に行くからさ」

その言葉にフランは少し考え、

フ「彩人が一緒に行ってくれるなら、少し怖いけど伝えてみる」

そう言ったフランの目には決意の色が窺えた。

二人の体が徐々に透けていく。どうやら目覚めが近いようだ。

彩「っと、そろそろ時間か。」

フランは未だに抱きついたままだ。

目が覚めるまでこうしているつもりだろう。

彩「それじゃフラン、またな」

そう言って笑った。

対してフランは、

フ「うん、今度は一緒に修行しようね」

ニコツと笑い返してきた。
その笑顔を最後に意識が沈んでいった。

夢の中の約束〜dream side〜(後書き)

ああ、眠い。

文才が乏しい。

感想・誤字指摘待ってます。

武器を手に入れよう・・・あるえ？（前書き）

今回はオリキャラが二人出てきます。

後ほど、詳細設定を投稿します。

それでは、どぞー

武器を手に入れよう・・・あるえ？

side 彩人

あの悪夢のような宴会から10日が立った。

案の定宴会の翌日は酷い二日酔いに襲われた。

あれは酷かった。立とうとすると天地がひっくり返ったような感覚に襲われまともに立つことができず、頭は万力で締め上げられたように痛んだ。

藍が来てくれなかったら次の日まで続いていたかもしれない。

藍の適切な処置のおかげで夕方ごろにはだいぶん楽になっていた。

ルーミアと橙もいろいろ世話をしてくれたから後でご褒美をあげなくちゃな。

余談だがルーミアと橙は宴会で仲良くなったらしく二人で協力する姿は微笑ましいものだった。

原因を作った霊夢と魔理沙だが、最初はしばらく口を訊かないつもりだった。

でも、すぐに謝ってきたのと本当に反省しているようだったので二人の頭を優しく撫でて許した。

しっかりと釘は刺しておいた上でね。

それと修行の方だが、空を飛ぶのはもう大丈夫だ。

それと、飛ぶよりも足に魔力を込めて空中で跳躍した方が弹幕ごっこにおいて立ち回りやすいことに気がついた。

弹幕は新たに二枚のスペルを作った。今はまだ秘密だけどそのうちね。

能力は、何ができるのかを把握すべくいろいろ試した結果、

・弹幕の軌道は少ししかずらせない。

・自然現象はだいたい操れる。（風、水、雷、etc・・・）

・時間操作は今の段階で約数秒
つてところだ。

あと、魔力を使って火を熾したり風を起こしたりもできるようになった。

10日での成果としてはなかなかだと思う。

フランとの修行の成果つてもある。どうやら2〜4日のサイクルで能力が発動するらしい。

10日で3回、夢の中に入った。

フランも徐々にコントロールできているようで加減が分かってきたようだ。

会うたびに抱きついてくるが今では靈力で身体を強化しなくても受け止められる。

フラン曰く、一緒に修行するようになってからは飛躍的に成果が出ているらしい。

それと、二人で弾幕ごっここの練習もしている。

お互いに相手の動きを観察して良い部分を吸収するため立ち回り方がどことなく似てきた。

10日間修行していて、ふと思った事があった。

彩「武器がほしいなあ」

団子を作りながらつぶやく。

遠距離戦もいいが、男だったら一度は剣を振るって見たいと思うものだろう。

彩「やっぱり刀だよな。それも二刀流で」

刀二本を携えて戦う。いいね、絵になるね。

できた団子を串に刺してさらに盛る。

思い立ったが吉日ということで、早速霊夢に相談すべく縁側へと向

かった。

彩「なあ霊夢、ちょっと相談があるんだけど」

縁側でお茶を飲んでいた霊夢に団子を渡しながら話しかける。

霊「ありがと。で、何よ相談って？」

霊夢は団子をモフモフと食べながら先を促してきた。

彩「ああ、武器を売っている店があったら教えてほしいんだけど・・・」

？「それならちょうどいい店を知ってるぜ」

途中で誰かの声に遮られた。その声は上空から聞こえてきて、一人の少女が庭に降り立った。

彩「おつ、魔理沙。ごきげんよう」

魔「ごきげんようだぜ、彩人」

互いに軽い挨拶を交わし、魔理沙は流れるような動きで縁側に座り団子を手に取り、口へと運ぶ。

霊「ちょっと、それは私のお団子よ！」

魔「いいじゃないか、おいしいものは皆で分け合うものだぜ」

彩「うれしいこと言ってくれるじゃないか」

そう言つて魔理沙の頭をわしゃわしゃと撫でる。

魔「わわッ！そ、それでだな武器を売っている店の話だが魔法の森の入り口近くにあるんだぜ」

少し頬が赤くなつたような気もするが店の話が始まつたので気にしないことにした。

霊夢はお茶を入れなおしにいったようだ。

人里ではなく魔法の森の近くにあること自体普通ではないな。

彩「どんな店なんだ？」

普通ではないことに好奇心が沸いてきて魔理沙に聞いてみる。

魔「いろんなガラクタや外の世界の物も扱っている道具屋だぜ」

ガラクタ云々は置いといて、自分の世界の物まで扱っていることは驚いた。

何か面白そうな事が起こる予感がしてうずうずしてくる。

彩「魔理沙、そこまでの道案内を頼めるか？」

魔「お安い御用だぜ」

そう言つて快活に笑う。

魔「じゃあ、早速行くか？」

霊「待ちなさい、私も行くわ」

霊夢が人数分のお茶を持って戻ってきた。

霊「そろそろ茶葉が切れそうだから補充しに行かないといけないのよね」

そう言っでめんどくさそうにため息をする。

彩「なら、代わりに買ってこようか？」

霊「いいわよ別に・・・それにタダだし」

後半の方は聞き取れなかったがどうやら一緒に行くみたいだ。

彩「それじゃ、お茶と団子を空けたら行こうか」

霊夢が淹れてくれたお茶をゆっくりと飲み干した。

お茶を飲んだ後に三人で道具屋なるところまで飛んでいった。
魔法の森は人間には有害な瘴気というものが発生しており危険なのだが、力の強い者や魔力を持っている者には影響が無いらしい。
しかも、魔法を使う者にとっては環境がいいらしく魔理沙もここに住んでいるだってさ。

あとで、魔法の修行をしに来よう。

そんなことを考えている間に目的地に着いた。

彩「こーりんどう？ここがそうなのか？」

なんというか、うん、ゴミ屋敷に見えなくも無いな。

狸の置物だったり、標識だったり置いてあるし。

中はいったいどうなっているんだか、あまり想像したくないな。

霊夢と魔理沙は一瞥もせずに入っていく。

そのあとを追いかけて自分も中に入った。

魔「こーりん、おじゃまするぜ」

霊「お邪魔するわよ、霖之助さん」

彩「こんにちは」

霊夢はさつさと奥へと行ってしまった。

魔理沙は武器を探すためにいろいろ物色している。

？「霊夢、魔理沙、邪魔しに来たのなら帰ってくれ」

眼鏡を掛けた銀髪の男性が迷惑そうにため息をついてからこちらを向いた。

霖「やあ、君は初めて見る顔だね。僕はもりちかりんのすけ森近霖之助。こーりんとでも呼んでくれ」

手を差し出して自己紹介してきたのでこちらもそれに応える。

彩「はじめまして、俺は狂咲彩人。好きに呼んでくれ」

軽く握手をして自己紹介をする。

霖「よろしく、ところで君は外人かい？」

いきなりだったので驚いたが服装を見れば分かるらしくそこまで驚かなかった。

彩「そうだよ、よく分かったね」

霖「君の服装を見ればね、生地が人里には無い物だから」

やはり、文明のレベルが違っらしい。まあ、どうでもいいけどね。

霖「それで、今日はどういった用件だい？」

危つく本来の目的を忘れるところだった。

彩「実は刀が二本欲しくて、魔理沙がここにあるってんで訪ねたんだ」

霖「そうかい、武器はそこにあるので全部だから、あと他の物も自由に見ていいよ。分からないことは僕に聞いてくれ」

そう言つて、椅子に腰掛け本を読み始めた。

魔理沙は何時の間にか居なくなっているし、仕方ない、一人で探すか。

少年物色中・・・

結論から言って微妙だった。

木刀から槍、薙刀、刀、剣、モーニングスターまであったがやはり自分に合った物はなかなか見つからず全てダメだった。仕方が無いので、外から流れ着いた物を見ることにした。

彩「なあ、こーりん。外から流れ着いた物ってここいら全部か？」

とある棚を指差し訊いてみる。なんか見覚えのあるものなんかもあるな。

霖「そうだけど、武器は見つかったのかい？」

彩「いや、気に入った物は無かったよ。今は気晴らしって所かな」

苦笑しながら答える。

霖「なら、少し見てもらいたい外の物があるんだけどいいかな？」

彩「分かる範囲でだったらいいよ」

そう答えるところりんは奥へと引っ込みいろいろと抱えて戻ってきた。

霖「僕的能力は、『道具の名前と用途が判る程度の能力』って言うてね、名前と用途は分かるけど使い方までは分からないんだ。それでも用途さえ分かれば大体使えるんだけどね」

そう言つて持つてきた物の中には、ゲームボーイやケータイ電話などの文明の利器もあった。

一つ一つ、使い方を説明していると奥から茶葉を抱えた霊夢と刀を二本抱えた魔理沙が戻つてきた。

霊「あら、ずいぶんと楽しそうね。武器は見つかったの？」

彩「残念ながら良いのは無かったよ」

少し残念だが無い物は仕方が無い。

魔「彩人、これはどうだ？なんだか鞘から抜けないんだけど」

そう言つて刀を二本渡してくる。

一つは黒地に風のような物が描かれた鞘、柄は青色だった。

もう一つは同じく黒地に桜の花びらが描かれている。柄は橙色だ。

霖「魔理沙、また勝手に持ち出してきたね。悪いがこれは売り物じゃないんだ。いわくつきの代物なんだよ」

こーりんは頭を抱えながら、説明する。

大変だなこーりんも。少し同情するぜ。

霖「これの最後の持ち主は凶悪な殺人鬼でね、数え切れないくらいの人を切つたそうだよ」

こーりんは刀の持ち主について語り始める。

霖「その殺人鬼の刀はいつも血に染まっていたらしくて、すぐに錆びてしまうから数多くの刀を使ったそうだよ。」

霊夢と魔理沙の顔が引きつっている。

そんな奴が持っていた刀には見えないんだけどな。
なんだか、力を感じるし。

霖「そんな時、殺人鬼が死んだって噂が広まってね、その殺人鬼の隠れ家にあつたのがこの刀って訳さ。」

話を聞いた二人の顔は真っ青になっており若干後ずさっている。

魔「あ、あははは、こーりんいくらなんでも脅かし過ぎだぜ」

霊「そ、そうよ。大体そんな刀がこんなところにあるはず無いでしょ」

二人は意地を張っているがビビりまくっているのが丸分かりだ。

霖「その刀が抜けないのは、中で完全に刃が錆びているから、と言われているね。殺人鬼の呪いがあるから封印が掛けられているとも言われている」

視線をこの刀に移す。

こーりんの言っていることはおそらくデマだろう。

時が経つにつれてそういう噂がひとり歩きしても可笑しくはない。

彩「そんなんじゃないよ、」

だから、言っちゃった。

霖「何が違うんだい？」

彩「この刀を殺人鬼が持っていたって事だよ。おそらく、誰にも触れて欲しくないからそういう噂を流したんじゃないかな？」

魔「ど、どうしてそんなことが言えるんだぜ？」

魔理沙が必死の形相で聞いてくる。

今の話を聞いたらそうなるのも無理は無いけど。

彩「まず、この刀から邪悪な気配が感じられない。話の通りのものなら霊夢が気づかない訳ないし、紫がほっとかないだろ？」

二人ともようやく気づいたようで「あっ！」と声をそろえた。

霊「じゃあ、刀が抜けないのはどうということよ？」

確かに呪いでも錆でも封印でもないなら抜けるはずだ。

でも、実際は抜けない。

一つ試してみたいことがあったのでこーりんに聞いてみた。

彩「なあ、この刀の名前って何て言うの？」

霖「確か、柄の青い方が春疾^{はるやめ}、橙色が春風^{はるかぜ}だったかな。それがどうかしたかい？」

三人とも不思議そうな顔をしている。

彩「いや、名前を呼んだら答えてくれるかなと思って。しかし、春疾と春風が、二つで春疾風^{はるやめふう}だな」

何気なく言った瞬間、刀が光った。

突然の光にみんな目を塞いだ。しかも手の中から刀が消えた。光が止み、目を開けるとそこには刀ではなく、二人の少女が立っていた。

一人は艶のある背中くらいまでの黒髪で青い浴衣を着ている。

もう一人は茶色い艶のある髪をポニーテールにして、橙色の浴衣を着ている。

二人は姉妹のように似ていて、浴衣の丈が太もあたりまでしか無くすらった足が伸びている。

どちらも霊夢や魔理沙に引けを取らないくらいの美少女だ。

あまりの出来事にしばし呆然としていたが沈黙を破ったのはポニーテールの少女だ。

？「んゝつよく寝たゝ。あなたが起こしてくれたの？」

彩「えっ？いや、えっと・・・」

突然話しかけられ少し戸惑う。

春疾「まずは自己紹介が先よ。はじめまして、貴方が私たちを起こして下さったのですね。私は春疾です。こっちが・・・」

春風「待つて、お姉ちゃん。自分で言うよ。春風です。よろしくお願いします。」

どうやら青い浴衣の少女が春疾、橙色の浴衣の少女が春風らしい。というか・・・

彩「俺は狂咲彩人、よろしくな。ところで、君たちはまさかさっきの刀か？」

全員の疑問を代表して聞いてみた。

春疾「そうです。私たちは二本で一つの名前を言った者のみを使うことのできる刀なのです」

春風「でも、時が経つにつれて誰も私たちのことを使える人が居なくなつて、あんな作り話が出来てからは近づこうともしなくなつたんだよね」

春疾「そして、長い年月の中で自我を持ち、この姿で仕える初めての主がご主人様です」

彩「ご主人様？俺が？」

正直、そんな器ではないんだけど。

そこで、やっと硬直の解けた魔理沙が捲くし立てるように春疾に詰め寄つた。

魔「じゃ、じゃあさっきの殺人鬼云々の話は作り話だったのか？」

春風「誰も私たちの事を抜けないからそういう話が出来たんじゃないかな？」

それを聞いて、魔理沙と霊夢は力が抜けたのかふたりで床にへたり込んだ。

魔「な、なんだよ。やつぱり嘘じゃないか」

霊「まったく、人騒がせね」

二人はぐったりとしている。これは今日の夕飯は俺が作ることに
りそうだな。

霊夢と魔理沙は置いといて、話を戻す。

彩「それで、君たちの名前は？」

春風「えっ？だからるか・・・」

彩「それは、刀の名前だろ。そうじゃなくて、君たち自身の名前だ
よ」

二人は戸惑っているようだが、俺個人としては自我を持ったのなら
刀だろうが名前が必要だと思う。

春疾「ありません。そもそも、私たちは刀です。名前なんて必要無
いと思います」

戸惑いながらも名前の無いことを伝えてくる。

彩「必要無いわけないだろ。名前はそいつが存在する証だ。確かに
刀の名前はある、でもそれは刀が存在する証だろ？」

昔、ばあちゃんに名前の大切さについて教えてもらったことがある。
同じ字でも名前は一人一人違う意味を持つ。それは、存在する人が
一人一人違うからだ。

名前をもらうこと、それはこの世界に生まれた証なんだって、教え
てもらった。

だから、名前が無いこの少女たちに名前を着けてあげたい。

彩「だから、俺がお前らに名前を付けてやるよ」

二人の頭を撫でながら穏やかに笑う。

彩「それに俺の刀になるんだったら、家族も同然だろ？」

二人はポカンとしていたがすぐに破顔し、

春風「家族・・・えへへ、なんかいいね、そういうの／＼」

春疾「ご主人様は、面白い方ですね／＼」

照れながらも了承してくれたようだ。

だがまず先にやることがある。

彩「こーりん、売り物じゃないのは分かるけどこの刀、譲ってもらえないか？」

まだこの刀の持ち主はこーりんだ。

どんな条件を出されるか分からないがこいつらのためにも何としても手に入れる。

そう決意した矢先、

霖「いや、それは君に譲るよ」

あっさりと譲ってくれた。

彩「へっ？いいのか？」

あまりにも淡泊なので思わず聞き返してしまった。

霖「ああ、それは噂の真偽がはっきりしていなかったから保管していただけだからね」

それに、と一呼吸置いて、

霖「君には外の世界の話や道具の使い方をいろいろ教えてもらったしね。正直僕としてはそちらの方が価値が上だよ」

どうやら、すんなりと手に入れることが出来たようだ。

俺は二人に向き直り、

彩「よし、それじゃ名前を付けるか。実はもう考えてあるんだ」

春疾・春風「お願いします」

彩「まず、春疾から。姓は刀の名前で、名前は【春一番とともに花を咲かさせる姫】と言う意味をこめて『咲姫』って言うのはどうだ？」

咲姫「春疾咲姫^{はるやみさき}……とても素敵な名前です！ありがとうございます！」

彩「次に春風だな。姓は同じく刀の名前を取って、名前は【春風とともに舞い踊る花】と言う意味を込めて『舞花』でどうだ？」

舞花「春風舞花^{はるかぜまいか}……とても可愛い名前だね、ありがとう！」

どうやら、二人とも気に入ってくれたようだ。

彩「それじゃ、これからよろしくな」

二人に向かって両手を差し出す。

咲姫「よろしく願います、ご主人様」

舞花「よろしくね、末永く可愛がってくださいね」

舞花が上目遣いでそんなことを言ってきた。目は悪戯っぽく輝いている

だから、舞花を抱き寄せ耳元で

彩「ああ、これからはずっと一緒だよ、舞花」

と囁いた。

瞬間、耳まで真っ赤にしたあと刀に戻ってしまった。

咲姫「すみません、ご主人様。あの子は、いつもああでして」

咲姫が謝って来る。

彩「いや、別に気にしてないよ。しかし、初心な奴だな。咲姫もやっ
つてほしいか？」

咲姫「い、いえ・・・私は別に・・・キャッ！」

咲姫にも舞花と同じように耳元で囁く。

彩「咲姫、ちゃんと名前で呼んで」

咲姫も舞花と同じく耳まで真っ赤にして刀に戻ってしまった。

彩「二人とも初心だな」

そう言うが自分もかなり恥ずかしかったのは秘密だ。

舞花「うゝゝ、彩人様を照れさせようと思ったのに逆にこっちが照れちゃったよゝゝ」

咲姫「あまり彩人様を困らせてはだめよ」

二人がティン。ーベルくらいのサイズで出てきた。

まだ二人とも顔は赤いけど。

舞花「驚いた？私たちは人型と刀、そして刀のまま自分の意識体を彩人様の周囲に出すことが出来るんだよ」

咲姫「ちなみに、人型の場合は自分と同じ刀を使うことも出来ます。あと、私と舞花は念話で遠くに居ても意思疎通が出来るんですよ。」

舞花「私たちは、刀だけにそれなりの剣術は使えるから危なくなったら彩人様を守るね」

そう言うてはにかむ二人が可愛くて、

彩「じゃあ、危なくなったら期待してるぞ」

自分もはにかんで答えた。

武器を手に入れよう・・・あるえ？（後書き）

オリキャラの二人は刀の付喪神です。

長い年月の果てに自我を持って次の持ち主を待っていたのです。

感想・誤字訂正待ってます。

人里と親の役目（前書き）

今回は、人里へ行きます。

果たして、また厄介事に巻き込まれるのか？
ちよっぴり、シリアスです。

それでは、どぞー

人里と親の役目

side 彩人

武器を買いに来たはずなのに、刀が女の子になったり、その女の子にご主人様って呼ばれたり、いろいろあったがとりあえず目的は達成できた。

自分の愛刀であり新しい家族、春疾咲姫と春風舞花。

この付喪神の姉妹は現在、ティン。ーベル位のサイズになって両肩に座っている。

彩「さて、思いもよらない出会いがあっただけど目的も達成できたしそろそろお暇しますか？」

未だにへたり込んでいる霊夢と魔理沙へそう問いかけた。

霊「そうね、そろそろ帰りましょうか。ほら魔理沙、しっかりしなさい！」

お互いに寄りかかっている状態なので、なかなか立つ事が出来ない。

霊「ああっ！もう！！」

痺れを切らした霊夢は魔理沙を突き飛ばしてようやく立った様だ。その魔理沙はガラクタの山に突っ込んでいった。

うわっ、痛そーだな。

両肩の二人は両手で顔を覆っている。

そんなことを思いながら魔理沙に近づいて、

彩「おゝい、大丈夫か？」

声を掛けてみると、

ガラクタを除けながら魔理沙が出てきた。

魔「いたたた、ひどいぜ霊夢、私が何したって言うんだよ」

若干涙目になりながら霊夢に講義する。

霊「あんたがさっさと動かないのが悪い」

霖「店の中で暴れるのはやめて欲しいんだけど・・・」

相変わらず霊夢は容赦ないな、こーりんは頭を抑えてため息をついている。

いつもこんな感じなんだろうな、ドンマイだこーりん、きっとそのうち良い事あるって。

心の中でエールを送る。

っと、それより二人にも紹介しなくちゃな。

彩「霊夢、魔理沙、紹介するよ。俺の守護刀で新しい家族の・・・」

咲姫「春疾咲姫です。よろしくお願いします」

舞花「春風舞花だよ、よろしくね」

俺のあとに続けて二人が自己紹介をする。

霊「ええ、よろしくね。」

魔「よろしくだぜ」

さっきの話を聞いていたからだろう、すんなりと受け入れられていた。

二人の紹介も終わったし、そろそろ帰るか。

彩「それじゃあこーりん、いろいろ世話になったな。」

霖「こちらこそ、有意義な時間だったよ。また、暇な時にでも来てくれ」

魔「じゃあなこーりん、また来るぜ」

霊「それじゃ霖之助さん、お茶もらっていくわね」

霖「できれば、客として来てくれ」

こーりんの対応の違いに少し噴出し、自分も二人を追いかける。すると、入り口近くでこーりんに呼び止められた。

霖「そうだ、人里にはもう行ったかい？」

人里ってその名の通り、人が暮らしている里のことだろう。そういえば、なんだかんだで行って無かったな。

彩「いや、まだ行ったこと無いな」

霖「それなら、帰りにでも寄ってみるといい。ここから神社まで半分くらい行ったところから見えるはずだ」

どうやら、こーりんの話では生活用品などは人里でしかまず買えないそうだ。

いつまでも神社に居候するわけにもいかないし、修行が終われば訪れる機会も増えるだろう。

それに人との交流は大事だって、婆ちゃんも言ってたしな。

両肩の二人も行ったそうにしているし、ちょうどいいかも知れない。

彩「サンキュ、今から行ってみるよ。いろいろと悪かったな」

いろいろとは、主に霊夢とか魔理沙とかのことだ。

霖「いや、君が気にすることじゃないよ。悪いのはあの二人だからね。・・・ハア」

こーりんがどこか遠くを見つめてため息をついている。

こーりんのため息をBGMに俺は逃げるように店を出た。

魔「遅かったな、何してたんだ？」

どうやら待ってくれてたようで二人は近くの切り株に腰掛けていた。

彩「ちょっと、世間話をね。それより、これから人里に行こうと思うんだけど二人はどうする？」

魔「私は・・・行かないぜ」

魔理沙が俯いて答えた。俯いているため表情は見えない。

霊「私も遠慮しとくわ。特に用も無いし夕飯の支度があるしね。あ

っ、夕飯までには帰ってきなさいよ」

どうやら霊夢も行かないようだ。しかし、最後のは久々に聞いた気がするな。もう何年も前に聞いたつきりだったからな。最後に聞いたのは何時だったかな・・・？

咲姫「彩人様！？どうなさったのですか！？」

彩「えっ？」

どうやら、少しボーっとしていたらしい。
心配そうな顔をしている4人が映る。

彩「ああ、大丈夫だよ。少し、昔を思い出してね。・・・霊夢」

霊夢は安堵した様子だったが名前を呼ばれ、キョトンとしている。
その様子がなんだか可笑しくて、頬が緩みかけるがそれをなんとか抑え、

彩「必ず夕飯までには帰ってくるよ。それと、ありがとね」

何故お礼を言われたのか分からないようで、またもやキョトンとしている霊夢と魔理沙に背を向け、

彩「じゃ、行ってくる」

人里へ向け地を蹴った。

人里への道中、鼻歌を歌いながら飛んでいると、舞花が口を開いた。

舞花「さっきは、何を思い出していたの？」

さっきとは、ボーっとしていた時の事だろう。

別に言いづらい事でもないの、ちょっとした昔話をした。

彩「俺にはさ、家族と呼べる存在が婆ちゃんしか居なかったんだ。

両親は俺を置いて、遠い別の国で生活していた」

彩「俺が遊びに行くとき、決まって『夕飯までには帰ってくるのよ』って婆ちゃんが言ってくれてたんだ」

二人は黙って聞いている。

彩「そんな婆ちゃんも去年、寿命で亡くなった。霊夢が、『夕飯までには帰って来い』って言うてくれたのがなんだか嬉しくてね、思わず昔を思い出していたんだよ」

話終わると、両親に温もりを感じた。

どうやら二人がくっ付いているようだ。

咲姫「今は、私たちが家族です。おばあ様の代わりではなく、私たちなりに彩人様を支えます」

舞花「彩人様は一人じゃないよ、私たちがずっと一緒にいる。だから、そんな寂しそうな顔しないで・・・」

どうやら、知らないうちに顔に出ていたようだ。

いらない心配を掛けちゃったな。

でも、確かにそうだ。今は二人が居るし、霊夢、魔理沙、紫、藍、橙、ルーミア、フラン、こーりんがいる。

何時の間にか俺も人の温もりを求めていたのかも知れない。

俺は独りじゃないんだな。

胸の奥が熱くなっていく感覚が心地いい。

俺は二人を優しく包み込み、お礼を言った。

彩「ありがとう、咲姫、舞花。おかげで元気が出たよ」

二人は照れながらもはにかんだ笑顔を咲かせた。

そんな道中の一コマである。

あれから、しばらく行くと家々が連なっているそれなりに大きな集落を見つけた。

おそらく、ここが人里だろう。

さすがに、飛んで入るのは礼儀的に如何な物かと思ったので里の近くで着地し、歩いて人里まで向かった。

門を抜けようとしたところで、衛兵っぽい人に何者が聞かれた。

これが俗に言う職質って奴か？嘘を吐くと後々面倒なので神社から来たことを伝えるとあっさり通してくれたが、なんだか反応が引かなかった。

畏敬の念というかそんな視線を感じる。

まあ、なにわともあれ人里に着いた。

人里の町並みは時代劇を連想させる造りでさまざまな人の往来がある。中には妖怪もいて店を経営している者もいた。

里なのに町とはこれいかに（笑）

彩「へー、結構賑わっているな、二人も人型になったらどうだ？」

そう提案すると、二人とも人型に変わった。腰には刀を差している。

舞花「うわー、いろんな物や人がいる。あつ、あれは何かな？」

そう言つて一人で先に進んでいく舞花。

咲姫「あつ！舞花、ちょっと待つてよ」

あわてて後を追う咲姫、しかしその表情は楽しそうだ。

そんな微笑ましい姿に自然と笑みがこぼれる。

付喪神として自我を持つてからこういった経験が無い二人には目に映るものの全てが新鮮なのだろう。

今日はとことん楽しむ、そう決め二人の後を追った。

舞花「わー、これ可愛い！ねえお姉ちゃん、これ可愛いね」

咲姫「そうね、二つで一つの商品だなんてまるで私たちみたいね」

二人が見ていたのは、髪を梳かす櫛だ。二つでワンセットらしく色も青色と橙色とがあり、桜の模様が描かれている。

主人「お嬢ちゃんたち良い目をしてるな。それは、像っていう大きな動物の立派な牙を特殊な製法で加工、彩色し当時最高の職人が2年を費やして完成させた代物なんだぜ」

店の主人が自慢げに言う。

主人「どうだい？安くしておくから彼氏に買ってもらいな」

咲姫「か、彼氏だなんて／＼ 彩人様は私たちの主です／＼」

彼氏と聞いて顔を赤らめる咲姫。

それには動じず舞花が値段を聞く。

舞花「ちなみに、いくらなの？」

主人「嬢ちゃんたちに免じてまけにまけて50円でどうだ？」

紫によれば幻想郷の一万円は現代の一万円に相当するそうだ。

話を聞いた限りじゃ間違いなく国宝級の代物が五十万、すげえ幻想郷。

舞花「うーん、やっぱり高いね。こんなに綺麗なんだもん」

舞花は少し残念そうに櫛を元の場所に置いた。

彩「それを売ってください」

その言葉に、舞花、咲姫、店の主人までもが目を丸くした。

主人「いいのかい？無理して今買うことも無いんだぜ？」

あまりにも予想外だったのか、売るのを渋っているようにも見える。きっと、無理している、とでも思われてんだろうな。

彩「心配には及ばないですよ」

そう言つて50円を差し出す。

彩「それに、女を満足させられる甲斐性を持つてこそ、男というものでしょう?」

その言葉を聞いた店の主人は、豪快に笑い、背中をバシバシと叩いてきた。

伸「気に入ったぜ、兄ちゃん。俺は伸^{ノブ}て言っただ。兄ちゃんの名前は?」

彩「俺は、彩人という者です」

伸「彩人が、良い名だな。ほら、持ってきた」

綺麗な布製の入れ物に入つた二つの櫛を渡される。

彩「はい、俺から二人へのプレゼント」

そう言つて、青い櫛を咲姫へ、橙色の櫛を舞花へ渡す。

咲姫「あ、ありがとうございます。でも、ほんとにいいんですか?」

咲姫はまだ戸惑っているようだ。舞花なんてよほど嬉しかったのか、抱きついてきた。

それを優しく受け止め、

彩「いいんだよ。俺が二人と出会つた記念に何か形に残して置きたかつたんだ」

と言うと櫛を大事そうに抱え、

咲姫「わかりました、大事にしますね」

とても魅力的な笑顔を咲かせるのだった。

とても綺麗だったので照れくさくなり、それを隠すため次の店へと向かった。

それからいろんな店を見て回ったり、甘味処で少し休憩したりしていたらあつという間に時間が過ぎて夕方になっていた。

彩「よし、そろそろ帰らないと霊夢に怒られちゃうな」

霊夢は怒るとすぐに手が出てくるから疲れる。

まあ、甘味で機嫌が直るけどね。

そろそろ、帰ろうとした矢先、人が集まっているのが見えた。

舞花「なんだか人が集まっているね、どうしたんだろ？」

彩「よし、いってみるか」

何か面白そうなことでもやっているのかと思い、人だかりに向け歩き出した。

人だかりには、屈強そうな男たちが集まっていてその中には伸さんの姿もあった。

彩「伸さん！この人ばかりはなんですか？」

伸「おう、彩人か。いやな、酒屋を営んでいる助六って奴がいるんだがその娘がまだ帰って来てないらしいんだ。」

伸さんは、少し焦っているようだ。

伸「もうじき日も暮れる。そしたら、妖怪たちの時間だ。搜索が困難になるどころか下手したら俺達まで食われちゃうかもしれない」

そこまで聞いて、俺は意識を集中した。

人里周辺の森の中から人の命の流れを読み取ることが出来た。そして、みんなには聞こえないように舞花に指示を出す。

彩「舞花、ここから南西の方角の森に今話で出てきた女の子がいるはずだ。その子を保護してくれ。みんなにはバレないようにな」

舞花は二つ返事で南西の森へ走っていった。

彩「咲姫は、舞花が女の子を保護したら教えてくれ」

咲姫「分かりました」

それを確認した俺は人だかりの中心へ向けて歩を進めた。

中心では、複数の男達と自分と同じ年くらいだろうか？少女がなにやら言い争っている。

と言うよりも、男達が少女になにやら頼んでいるようだった。

男1「お願いだ先生、俺たちにも探させてくれ」

男2「そうだ、子供が危険な目に遭っているかも知れないのに家で待っているだけなんてできねえ」

男3「子供は命に代えても守るのが親の役目だ、みんなそうだろ？」

他の男達も口々にそうだそうだ、などといったている。
対して少女の方は、

？「しかし、もうじき日も暮れる。夜は妖怪達が活動する時間なのは皆知っているはずだ！」

男2「それでも、手分けして探せばすぐに見つかるはずだ」

？「危険すぎる！もう活動している妖怪だっているかもしれないんだぞ！」

と、なんとか落ち着いてもらおうとしている。

しかし、男達は熱した油のようにヒートアップしていて少女の声は届いていない。

というかこの子、純粋な人間じゃないな。

なるほど、この子が探しに行くのを、『俺たちも連れてってくれ』って引き止めているわけか。

で、この子はそんな気持ちを無下に出来ず、こうして留まっているわけか。

優しいな、この子は。それに比べてこいつらはとんだ凡愚だな。

まるで、状況を理解していない。気持ちだけでどうにかなったら争いなんて起こらないってのに。

ふつつつと怒りが沸いてくる。

だから、言っちゃった。

彩「馬鹿だな、お前ら」

この一言で場が静まり返った。

あれだけ騒いでいた男達が皆一斉にこちらを見ている。

そして、おそらく件の女の子の父親であろう男、確か助六だったか？がこちらを睨み付けながら怒鳴った。

助六「あ？誰が馬鹿だって？」

その眼光は今にも掴みかかってきそうな勢いである。
しかし、そんなものど吹く風のように受け流す。

彩「ああ、聞こえた？いや、あまりにも馬鹿らしくてつい口が滑った」

いつもの、世間話でもするかのように答える。

助六「てめえ、もういつペン言ってみ！！？」

胸倉を掴もうとした手を受け流しその力を利用して地面に叩きつける。いわゆる合気道だ

助六は、背中から思いつき叩きつけられたことで肺の酸素が詰まり、浅い呼吸を繰り返している。

彩「なあ、あんただって分かっているんだろ？」

先生と呼ばれた少女の方を向き、話しかける。

彩「夜は妖怪達の時間だ。早く行かないと手遅れになる。それにな

んの力も無い人間を連れていったってどうなるかくらいさ」

少女は俯いている。

悔しいのだろう、自分ではこいつらの気持ちを汲み取ることができないのだから。

彩「状況を良く見る、妖怪相手に何ができる？唯口を開けて待つている蛇の口の中に蛙が飛び込むような物じゃねえか」

周囲の男達は唯黙っている。

助六「それでも、親は子供を命を懸けて守るもんだろ！？」

ようやく立ち上がった助六が叫んだ。

彩「さあな？俺の親は自分の子供を置いて遠くに行くような奴らだからな。それが普通なのかはわかんねえよ。ただな・・・」

助六の胸倉を掴む

彩「命を賭して守った子供を置いて先に死ぬというのがどういうことだか分かって言ってるのか！？置いていかれるって事がどれだけ寂しくて悲しいのか、分かってんのか？」

もう限界だ。怒りの感情に身を任せる。

彩「親は命を賭けて子供を守る？そうだな、そのとおりだよ。俺の親が特殊だったってだけで普通はそうだな。けどな、自分の器も測れないような奴が偉そうなこと言ってんじゃねえよ！！」

だんだんと血が目が集まっていくのが分かる。

彩「何の力も無いお前らが行ったところでなんになる？せいぜいこの子の足を引つ張る程度が関の山だろーが！あんたたちはこの子を苦しめるつもりか？」

助六「そ、そんなわけがあるか！！」

声に力が籠ってない。完全に吞まれている。

彩「いいか？守りながら戦うつてのがどれだけ辛いのか、守れなかったことがどれだけ辛いのか、お前らには分かるのか？」

ゆつくりと手を離す。助六は地に膝をつき項垂れている。周囲の男達も、もはやさっきの熱は感じられない。

彩「こうしている間にもあんたの娘は妖怪に襲われているかもな」

とどめの一言、助六は声を殺して泣き始めた。

彩「そこで泣いているがいいさ。でも、泣いたって状況は変わらないぞ」

言いたいことは言った。後は・・・、

咲姫「彩人様、舞花が無事に保護したそうです」

どうやら、妖怪には襲われてなかったようだな。そのことに安堵しつつも気は緩めない。

彩「分かった。今から合流するからしっかりと護衛するように言ってくれ」

咲姫「分かりました」

完全に冷え切った人だかりを一瞥し南西の森へ急いだ。

舞花「あっ！彩人様！ここだよ」

舞花が大手を振って叫んでいる。その隣には、10歳前後の女の子がいた。

彩「舞花、お疲れ様」

舞花の頭をなでなでする。舞花はえへへ、と嬉しそうに笑った。

舞花の隣にいる少女の目線に合わせ話しかける。

彩「こんばんは、俺は彩人。君は助六さんの娘で合っているかな？」

少女がコクンとうなづく。

やはりこの少女で間違いないようだ。

彩「みんな心配しているよ。さ、お家へ帰ろう?」

そう言つて、少女に手を差し出す。
少女は戸惑いながらも小さな手でしっかりと握り返してきた。

人里では、未だに人だかりがあつた。あたりはすっかり夜になつていて、その雰囲気はお通夜にも引けを取らないくらいに沈んでいた。まったく、あれから進展してないのかよ。しかも、諦めかけているし。

あまりにも空気が重いがそんなこと知つたことではない。三人を近くで待たせ、助六の元へ向かう。
助六はまだ泣いていた。

彩「なんだ、まだ泣いていたのか？」

話かけるとその場の全員がこちらを向き、先生と呼ばれた少女以外は非難の視線を浴びせてきた。
中には罵倒する者もいる。

助六「な、なんだ、俺を笑いに來たのか？」

鼻をすすりながら、非難の視線を浴びせてくる。どうやら、嫌悪と憎悪も混じっている。

やれやれ、嫌われたものだな。

彩「別に、あんたにお届けものがあつてね・・・咲姫、舞花！」

その言葉に、意味が分からない顔をしていたがすぐに驚愕の表情になる。

？「おとうさん！！」

少女が助六の元へと走っていく。

助六「えっ？ あれ？ 七瀬？七瀬なの・・・か？」

助六は困惑している。他の男達や先生と呼ばれた少女も状況が飲み込めず呆然としている。

七瀬「そくだよ、お父さん！！」

笑い泣きしながら助六に抱きつく。

助六「あつ、あああつ！！良かった！本当に良かった！」

七瀬「お父さん、苦しいよ」

瞬間、歓声が拳がった。先ほどまでの空気は一瞬にして消え、歓喜がその場を支配した。

感動の親子の再会に水を差すようだがこれだけは言っておかなければ、

彩「これは貸しにしておくよ、後で返してもらうからな。今回は運が良かったけど、次もどうにかなるなんて思うなよ。それと・・・」

一呼吸おき、満面の笑顔で、

彩「大事ならその手を二度と離すな、どんなことがあっても決して離すな」

それだけを言い、人里を後にした。

助六「あ、ありがとうございます!!」

七瀬「助けてくれてありがとうね。お兄ちゃん、お姉ちゃん!!」

背後からは、感謝の言葉と人々の歓声が聞こえた。

その後、博麗神社に帰ったら無数の陰陽玉が飛んできたのは余談である。

人里と親の役目（後書き）

これで、人里の顔出しは終わりました。
次は、妖怪の山にでも行こうかな。

感想・誤字訂正待ってます。

妖怪の山へ行こう！

目の前には、外見的に自分よりも2、3歳年下の少女が夕日を背に仁王立ちしている。

？「彩人よ、無事に帰りたくばこのわしを倒してみせよ」

まだ発育途中の胸を張って尊大な態度をとる少女。
どうしてこうなった？
話は少し前まで遡る。

side～彩人～

人里の一件から3日ほど日が経った。

朝食を作りながら、今日の修行について考える。

彩「今日も剣術の稽古かな。あれなら、霊力・魔力を総合的に鍛えられるし何より接近戦は能力が使いやすいからな」

霊力で身体を強化しつつ、時折魔力で作った弾幕を混ぜながら咲姫、あるいは舞花と仕合をする。

二人はかなりの実力を持っていた。始めに二人に仕合をしてもらったのだが、霊力で強化しないと目で追いきれない速度で斬り合っていた。

正直、この二人に追いつける気がしない。（剣術的な意味で）
二人の指導が良かったのか、もともと才能があったのか、3日でかなり形になってきたようだ。

かなり手を抜いている状態の二人と切り結ぶくらいまでは上達した。ちなみに、いきなり二刀流は厳しいとの事で基礎である一刀流から始めた。

咲姫を使うときは舞花が、舞花を使うときは咲姫が相手をする。ついでに剣術用スperlも2枚作った。

舞花「彩人様、ご飯炊けたよ」

咲姫「魚も焼きましたよ」

彩「じゃあ、ご飯をお椀に盛って、魚は皿に大根おろしと一緒に装って」

二人は、「はい」と返事をしてそれぞれ動く。

今は二人に料理を教えている。

二人が自分の料理を初めて食べた時、とても感動したようで料理を教えて欲しいと言ってきた。

別に断る理由も無いので、快く了承しそれから料理を作る際は毎回手伝うことにした。

霊夢も自分の負担が減ると言うことで大賛成だった。

出来た料理を居間へと運び、霊夢を起こしに行く。

全員そろったところで、いただきます、と合掌し朝食を食べ始めた。

霊「それで、今日はどうするつもりなのよ？」

霊夢が味噌汁を飲みながら訊いてくる。

彩「今日はそうだな、午前中は剣術の稽古、午後は山に出かけようと思う」

霊「そう、妖怪の山に行くなら天狗には気を付けなさい。あんた達なら大丈夫だろうけど、見つかると思われと面倒よ？」

そう言っ、食事に戻った。

彩「そうなのか？わかった、気をつけるよ」

そんな会話を朝食時にしていた。

午前の修行を終え昼食を食べた俺と姉妹は、妖怪の山の麓まで来ていた。

ここが妖怪の山か、なんだかそれなりに強い妖力を感じる。

咲姫「なにやら、山の中が騒がしいですね。どうします？」

咲姫が言っように、七合目に近いあたりで妖怪たちが騒いでいるようだ。

彩「それじゃ、見つからないように気配を消して頂上まで行っってみようか」

そう言っ、三人は歩き出した。

歩き始めて約二時間、どうにか見つからずに頂上まで来れた。

しかし、道中はなにやら天狗と思われる妖怪が誰かを探しているようだった。

おかげで、結構時間が掛かった。

舞花「うわゝ、いい眺めだねゝ。あつ、あれ人里だよ！」

そう言つて、舞花がはしゃぐ。

確かに山の頂上から見下ろす幻想郷は絶景だった。

緑の絨毯と表現してもいい雄大な自然、その中で必死に生きる動物達。

あの日、夢で見た光景が今は眼下に広がっている。

彩「綺麗だな、すごく綺麗だ」

思わず、そんなことを呟いた。

？「そうじゃろ？ここの景色は幻想郷の中でも上位に入るほどの絶景なのじゃ」

俺でも、咲姫達でも無い声が響く。

咲姫達は刀に手をかけ、戦闘態勢をとる。

俺は、構えもせず声の主がいる方を向いた。

？「人間が付喪神とはいえ妖怪を従えて、バタバタしているとはいえ天狗たちの目を掻い潜り、山の頂上まで登ってこれるとはのう」

そこには、艶のある肩くらいで切り揃えた黒髪が特徴の美少女が木の枝の上に座っていた。

おそろく天狗であろう少女、- 中から立派な翼が生えている - はこちらを見て愉快そうに笑った。

咲姫が戦闘態勢のまま叫ぶ。

咲姫「あなたは何者ですか？危害を加えるつもりなら容赦はしません」

咲姫と舞花は今にも斬りかかる勢いだ。
それを手で制して、二人の前に出る。

彩「いきなり喧嘩腰になってしまつて悪かつた。俺は、彩人。こっちは咲姫と舞花だ。君は天狗・・・だよな？」

とりあえず、いきなり戦う事になるのは避けたかったので自己紹介と詫びをする。

その態度に少女は目を丸くし、また愉快そうに笑つた後、こちらの質問に答えた。

凧「お主なかなか面白い奴だな。いかにも、私は全ての天狗のトップにして天狗の里の長、天魔の孫娘、涼風凧^{すずかぜなぎ}じゃ」

その威風堂々とした態度は、なるほど、上に立つものの風格が見え隠れしていた。

彩「凧か、いい名前だな。それで？俺達に何か用かな？」

名前を褒められたことがうれしかったのかフンと自慢げに笑う。

凧「いや何、ここで日ごろのストレスを発散していたところに付喪神を従えた人間が来たものだからな、つい話しかけてしまったのじゃ」

どうやら、敵意は無いようだ。二人も戦闘態勢を解除する。

彩「そうなのか。ここであつたのも何かの縁だし、一緒にお茶でもどうだ？」

そついいながら、外から持ってきたシートを広げ作ってきた団子とお茶を用意する。

凧はますます愉快げに笑い、下に降りてきた。

凧「本当にお主は面白い奴じゃな、せつかくじゃし頂こうかの」

こうして、人間と付喪神と天狗のお茶会が始まった。

そのころ、天狗の里では・・・

天狗1「凧様は見つかったかつ!？」

天狗2「どこにもいませんっ!!もしかしたら、里にはすでにいないのでは?」

天狗3「ええええい!いったいどこに行ってしまったのか?」

凧が居なくなつたことで上層部の天狗は焦り、大規模な搜索が行われていた。

とぼつちりを受けたのは、哨戒任務を主とする白狼天狗と機動力に優れる鴉天狗たちである。

？「まったく、凧様もうちの上司たちも困ったんですね。とばつちりを受けるのはこっちなのに」

そう文句を言うのは、黒い翼を持つ鴉天狗の少女だ。

？「まったくですね、凧様ももう少し自重して欲しいです」

それに同意するのは白い狼の耳と尻尾を持つ白狼天狗の少女。
二人は同時にため息を吐き、凧の搜索を開始する。

？「仕方ないですね、さっさと見つけて取材に戻りますか。行きま
すよ凧」

そう言つて空へと飛び立つ鴉天狗の少女。

凧「あ、待つてくださいよ。文様」

凧と呼ばれた白狼天狗の少女はあわてて後を追いかける。

そんなことは露知らず、4人はお茶を啜りながら、雑談をしたり凧の愚痴を聞いたりしていた。

凧「それでな、大天狗は酷いんじや。何かにつけて『あなたはこの里の長となるのだから……』とか言うんじやよ」

彩「うんうん、それは大変だね」

どうやらこの少女、日々の窮屈な日常に嫌気が差し、時折脱走してはここに来ているらしい。

凧の祖父にあたる天魔は厳しくも話が通じるようで、ある程度のことには目を瞑っているらしいがそれは大天狗の責任になるため彼らは気が気でない。

凧「分かってくれるかっ！！お主はいい奴じやの」

そう言いながら、肩を組んでくる。

凧は団子を一口食べ、顔を綻ばせた。

凧「しかし、この団子はうまいの、本当にお主が作ったのか？」

どうやら、気に入ってくれたらしい。

やっぱり、喜んで食べてもらえると作ったほうとしては嬉しいものだ。

彩「たくさん作ったから、お土産に持っていくか？」

凧「ぜひ頼む」

そんな話をしていると咲姫が棘のある声で、

咲姫「ちよつと凧、彩人様にくつつき過ぎよ！」

と言ってきた。

凧「む？別に良いではないか。何か問題でもあるのか？」

それに舞花が、

舞花「アハハ、お姉ちゃん焼きもち妬いてる」

咲姫「なつつつ！？／＼／」

咲姫の顔が赤く染まる。

凧「お主は随分好かれておるようじゃの」

凧がこちらを悪戯っ子のような目で見てくる。

彩「そりゃ、家族だし。こいつらが嫌がる様な事をする趣味は無いから当然だろ？」

何をこいつは当たり前のことを言っているんだ？

その反応が面白く無かったのか、若干不満げに、

凧「つまらん反応じゃの、わしは咲姫のような反応を期待してたんじゃない」

ぶー、とでも聞こえてきそうな感じで頬を膨らます。

そんな事言っても事実だしな。

楽しい時間はあっという間に過ぎ、太陽は西に傾いていた。

彩「さて、いい時間だし、そろそろ帰るか」

早く帰って夕飯の仕度をしないと霊夢に怒られる。

凧「ぬ？もう帰るのか？まだいいではないか」

凧が上目遣いで引き止めてくる。

正直グツとくるがまだ死にたくないのでもやんわりと断る。

彩「いや、家の家主が恐いからさ今日は帰るよ。凧もじいちゃんとか心配してると思うから早く帰ったほうがいいよ」

できるだけ相手の機嫌を損ねないように説得する。

凧「それはそうじゃが、わしはまだお主と一緒に居たいんじゃ」

多分深い意味は無いよね、そうだと信じたい。

ああ、後ろの咲姫と舞花から黒いオーラが出ているような気がする。

彩「また、遊びに来るからさ。今日のところは帰ろう、な？」

凧は俯いている。

俯いたまま凧がとんでもないことを言いだした。

凧「ならば、わしと勝負してわしが勝ったら一緒に居てくれるな？」

・
・
・

は？どうしてそういう話になった？

そして冒頭に戻る。

凧「ルールはどちらか一方が被弾したら負け、簡単じゃろ？」

凧「さあ、どこからでも掛かって来るがいい」

自信満々に仁王立ちしている凧。

彩「いやいや、なんで戦う話になっているんだよ」

まったく訳がわからない。

頭を抱えていると、凧が当然だ、とでも言うように、

凧「簡単なことじゃ、わしはお主と一緒に居たい、お主達は帰りたい。どちらも引かないならば、これはもう戦って敗者が勝者の言う事を聞く方が手っ取り早いし、両方納得できる」

なるほど、一理あるな。

その理由に納得していると、痺れを切らした凧が、

凧「こないのならばこちらから行くぞ！！」

弾幕を展開してきた。しかも、一つ一つが早い。

彩「しょうがないな、咲姫！舞花！」

俺が呼ぶと、両手に刀が出現した。

迫りくる弾幕を最小限の動きで避け、或いは斬り伏せる。

二刀流で戦うのは初めてだが、やるしかない。

凧「なかなかやりおるな、ならこれはどうじゃ？」

そう言つて懷からスペカを取り出す。

凧「風刺『ふうし風針連華ふうしんれんげ』」

凧を中心に4つの花が現れる。

目を凝らすと、無数の針状の弾幕で花の形を作っており、一本一本が竜巻を纏っている。

それが自分目掛けて射出される。

竜巻を纏っているため、いわゆるジャイロ回転になっているので速度と貫通力が桁違いに上がって、岩なんかやすやすと貫いて来る。

あんなのまともに食らえば蜂の巣確定だろう。

なのでこちらもスペルを唱える。

彩「月花『月明かりの道標』」

これはルーミアと一緒に作ったスペルで、俺の能力を利用して弾幕の流れを読み、安全地帯を一瞬で割り出す回避重視のスペルだ。

自分が通った後は弾幕が出現して相手に向かって飛んでいく。攻撃も忘れてないよ。

避けきられたのが意外だったのか少々驚いている。

凧「けっこう本気のスペルだったんじゃが、掠りもしないのはちとショックだの」

そう言いながらも顔は楽しそうに笑っている。

こちらとしては、あまり時間が無いので一気にケリをつける。

凧「ではでは、お次はこれじゃ」

そう言つてスペルを唱えようとしたところを遮つて、

彩「悪いが急いでいるんでね、次は無い！」

スペルを同時に2枚発動させる。

彩「流星『スターダスト・レイン』、狂咲『桜花爛漫』」

凧の周囲に無数の桜の花びらが展開し動きを止め、空から星が降つてきて凧に次々と襲い掛かる。

今回はピンポイントで発動させたため範囲は凧の半径2メートル程度だ。

もちろん、攻撃力は極限まで下げた。多分、でこピンくらいの威力だろう。

凧「はっ？えっ？きゃあああああああああああ！」

次々と被弾していく。

威力を下げておいたから霊力も魔力も減つてないけど、2枚同時使用は疲れるな。

スペルが終了し、凧の姿が見えた。

彩「俺の勝ちだな？」

凧のところまで近づき確認する。

凧「あんな反則気味のスペルを2枚同時に使うなんて・・・彩人は

意地悪じゃな」

少し涙目になりながら拗ねた風に凧が言う。

確かに、周囲は桜の花びらで上から星が降ってくればまず逃げ道は無い。

魔理沙のマスタースパークと同じ位の火力が無いとまず回避できないだろう。

普通に二枚同時に使ったら、霊力・魔力不足で倒れるだろうけどね。俺は凧の頭を撫でながら、

彩「また、遊びに来るから。今度は、団子の他にもおいしい物を作ってきてあげるからさ……」

それじゃダメかな？、と凧に問いかけた。

凧「わしは負けたんじゃ、今更止めはせん。じゃがな、約束じゃぞ。必ずまた遊びに来るんじゃぞ。団子とかも忘れるな！」

しぶしぶだが、帰らせてくれるようだ。

これは、約束を守らなかつたら後が恐いな。

そんな事を思いながら帰路に立つ。

彩「それじゃ、またな凧」

大きく手を振って博麗神社に向けて飛んだ。

その途中……

彩「なあ、何で二人とも腕を絡ませてくるんだ？飛びづらいんだけど」

何故か二人は、俺の腕に自分の腕を絡ませて胸を押し付けるように抱きついてくる。

意外とあるんだな・・・。

そう思ってしまうのは悲しい男の性か。

咲姫「何でもないです」

舞花「何でもないよ」

理由を聞いてもはぐらかされてしまい、結局神社に着くまで二人は腕を絡ませたままだった。

side 〽 風 〽

不思議な人間だった。

そして面白い。

妖怪、それも天魔の孫娘と聞いても態度が変わらず、まるで友達に話しかけるような気軽さで自分と接した人間。

まさか、お茶に誘われるとは思わなかった。

初対面の妖怪をお茶に誘うなんて、つくづく面白い。

しかし、せつかくの誘いなのでご馳走になった。

中でもあの団子は絶品だったな。

団子は、柔らかくも独特の弾力があり、ほのかに甘い。

その上品な甘さを損なわないように味付けされた醤油だれ。

お土産にと、20本程もらったので後でお爺様にも差し上げよう。

それに奴と話していると不思議と心が落ち着いた。

なんというか、安心できるというか、和むというか、多分どっちもだろう。

今思えば、この時から奴、彩人に惹かれていたのかも知れない。

通りで、あの姉妹からの視線が厳しかった訳だ。

凧「クスクス、次会うときが楽しみじゃ」

思わず、顔がにやける。

今の顔を大天狗が見たらきつとお小言が始まるだろうな。

？「やっと見つけましたよ、探すこっちの身にもなってください」

鴉天狗の少女が空から降りてくる。

凧「む？文か。それならば、わしの待遇改善を大天狗に要求してくれ」

文と呼ばれた少女はため息を吐きながら、

文「大いなる権力の前に私が何を出来るって言うんですか？」

至極まっとうな事を言う。

？「はあ、はあ、やっと追いついた」

今度は狼の耳と尻尾がついている少女が降りてきた。

凧「おお、椀も一緒だったんじゃない」

何とか息を整えた椀は文句を言ってきた。

椀「まったく探すこっちの身にもなってください。いつも、とばかりを受けるのは私たちなんですから」

と、若干涙目になっている。

凧「すまん、すまん。ほら、これをやるから機嫌を直してはくれぬか？」

そう言って、彩人特製の団子を二人に手渡す。

しかし、団子を訝しげに見つめるだけで、口をつけようとはしない。

文「この団子、どうしたんですか？」

どうやら何故団子を持ってるかが気になったらしい。

凧「いやな、頂上まで登ってきた人間と付喪神にお茶に誘われてなお土産にもらったのじゃ」

それを聞いて、二人は目を丸くして驚いた。

椀「えっ？いつ侵入されてたんだろ？」

文「天魔の孫娘と普通にお茶ができる人間……これは、スクープ

の予感ですね！」

しかし、反応は正反对で椀は焦り、文は目を爛々と光らせている。

凧「とにかく、食べてみるのじゃ。絶品じゃぞ」

二人はそれぞれ団子を口に入れると顔が綻んだ。

凧「どうじゃ？美味いじゃろ？」

椀「おいしいです！今日の疲れなんて吹っ飛んじやいました！」

椀は千切れんばかりに尻尾を振っている。

文「確かに、これほどのお団子は始めて食べました」

文も驚いているようだ。

その反応に満足し、

凧「さ、そろそろ帰るかの。文、椀、いつまでも余韻に浸っていないで帰るんじゃ」

二人を置いて空へと舞い上がる。

文「あっ！待ってくださいよ」

椀「置いてかないで下さい」

二人はあわてて追いかける。

風「（次はいつ会えるかの〜）」

少女は、興奮を抑えられない子供のように空を翔けて帰っていった。

妖怪の山へ行こう！（後書き）

感想・誤字訂正待っています。

子供と歴史と少女達の雑談（前書き）

ついに、10000PVを超えました。これも皆のおかげです。
どうか、これからもよろしくおねがいします。

それでは、どぞー

子供と歴史と少女達の雑談

若々しい青葉に日差しが降り注ぎ朝露が光輝いている。
そんな清々しい朝、博麗神社の境内に金属音が鳴り響く。

彩「ハッ！」

キーン、と音を立てて刀と刀がぶつかり合う。

舞花「いい感じだね、ちゃんと剣圧が伝わってくるよ」

いつもより早く目が覚めた彩人は、特にすることも無いので朝稽古に勤しんでいた。

いつもと時間が違うだけなのに、周りの自然も朝の空気もどこか新鮮で稽古もまたいつもとは違う感じがする。

偶にはこういうのもいいかな、などと考えていると、

舞花「スキありっ！」

舞花の剣撃を捌ききれず、刀が弾き飛ばされてしまった。

弾き飛ばされた刀が地面に落ちる瞬間、少女の姿に変わりこちらに駆け寄ってくる。

舞花「もう~~~~っ！！彩人様、余計な事考えてたでしょ？」

舞花が膨れっ面になりながら詰め寄ってくる。

彩「あ、バレた？」

どうやら、先ほどの事を考えていたのが剣筋に出ていたらしい。

舞花「当たり前だよ！彩人様に剣術を教えているのは私たちなんですよ？」

「どうやら、機嫌を損ねてしまったようだ。とりあえず、舞花の頭を撫でながら謝つとく。」

彩人「ごめんね、偶には早朝に稽古をするのも悪くないって思ってた」

舞花は気持ちよさそうに目を細める。

舞花「まあ、いいよ。彩人様は思った以上に上達が速いから」

そりゃそうだ、2〜4日に一度とはいえ、フランを相手に弾幕ごっこだの能力の練習だのやっているからな。

もちろん、弾幕ごっこでは刀を使っている。夢の中だし何でもありだし。

最近はお互いに大分力の使い方が分かってきて、今では全力で弾幕ごっこをしている。

最初は力任せだったフランも緩急を付けたりといろいろ考えている。俺自身、最初のうちは能力を使って避けるだけで精一杯だったが今では互角に戦える。

夢の中なら周りを気にする必要もないし、何より全力を出し合う事で能力にも磨きがかかる。

つい最近気づいたが、霊力や魔力は限界まで使うほど、その上限が上がるらしい。

しかも、夢で全力を出し切ると、少しだが確実に霊力・魔力の上限が増えていた

おかげで、総容量が霊夢と同じくらいになった。

咲姫「一段落着きましたし、そろそろ朝食の準備をしませんか？」

咲姫がそう提案してくる。

確かに、そろそろいい時間だな。

彩「よし、それじゃ朝食を作るか」

二人を連れて、台所へ向かった。

朝食を食べ終えた俺たちは、幻想協の地理を把握するために散歩へ出かけた。

照りつける太陽の光を能力で調節して、澄み切った空を飛んで行く。

一応お昼には一旦戻る予定だが、さて、どこに行こう？

咲姫と舞花はちっちゃいサイズになって肩に座っている。

彩「とりあえず、人里に行ってみるか」

人が多いところに行けば何か面白い情報があるかも知れない。

それにまだ見て回って無い部分もあるし。

そう思い立ち、人里へ向けて飛んだ。

少年・付喪神移動中・・・

彩「よつと、到着」

人里は相変わらず賑わっているようだった。

まだ朝方と言う事もあって、いろんな人がせしわなく動いている。そんな中、伸さんの姿を見つけたので挨拶に行った。

彩「伸さん、おはようございます」

咲姫・舞花「おはようございます」

咲姫と舞花も人型になり挨拶をする。

伸「おう、彩人に嬢ちゃん、おはよう」

伸さんは作業の手を止め、こちらに近づいてきた。

彩「みんな忙しそうですね、いつもこんな感じなんですか？」

伸「おおよ、この季節は日が長いからな。朝早く起きて、仕事しに行くんだ。それよりも・・・」

いきなり肩をつかんだと思ったら豪快に笑い、

伸「いやー、やっぱり俺の目に狂いはなかったわ」

肩をバシバシ叩いてくる。正直痛い・・・。

彩「は？ええと、何のことですか？」

訳がわからないので取り敢えず理由を聞いてみると、

伸「とぼけんじゃねえよ。人里の男どもを落ち着かせ、尚且つ、助六ん所の嬢ちゃんを助けたじゃねえか」

ああ、あの時の事か。別にあれば、子供は最初から助ける気だったけど、あいつらの行動に腹が立ったから勝手にやっただけで深い意味は無い。

伸「あのあと、お前の評価はうなぎ上りでなあ、いやー、正直やる男だとは思ったが予想以上だったな」

どうやら、嫌われずに済んだらしい。あれだけ派手にやったからどうなるかと思ったが杞憂だったようだ。

彩「そうなんですか。ところで、この人里で面白そうなところとか無いですかね？」

話が終わったようなので情報収集に入る。

伸「面白いかは分からないが、慧音先生がやっている寺子屋と後は人里で一番大きな屋敷に住んでおられる稗田様が幻想郷縁起つって歴史を書き残しているな。今は九代目だったか？・・・悪い、これくらいしか思いつかねえ」

そう言つて、頭を下げてくる。

彩「いえいえ、十分ですよ。では、そちらに伺つてみます」

伸さんに別れを告げ、歩きだす。

さて、まずは寺子屋に行つて見ようかな。

確か現代で言う学校だったよな。

少年・付喪神移動中・・・

どうやら、ちょうど休み時間になったようで子供たちが元気に走り回っている。

そのうちの一人の女の子がこちらに気づき近寄ってきた。

？「やっぱり！あの時私を助けてくれたお兄ちゃんとお姉ちゃんだ！」

そう言いながら抱きついてくる。確かこの子は・・・、

舞花「確か、七瀬ちゃん・・・だったっけ？」

七瀬「そудだよ、覚えてくれたんだね」

今度は、舞花と咲姫に抱きつく。

他の子供たちもわらわらと集まってきた。

七瀬「ねえねえ、一緒に遊ぼ？」

べつに、急ぎの用事も無いので了承しようとしたら、

？「すまない、ちょっといいかな？」

後ろから声を掛けられた。

そこには、あの時先生と呼ばれていた少女が立っていた。

なるほど、ここの先生だったのか。

しかし、あの時は暗くてよく分からなかったが、青みがかった白髪に端正な顔立ち、メリハリのあるスタイルに頭には前衛的な帽子を被っている。

若干、幼さが見え隠れしているがそれでもかなりの美少女だ。幻想郷には美人しか居ないのか？

そんなことを思っていると、

？「先生はこの人達と少し話があるから戻ってくるまで自習してくれ」

そう言っていると、子供たちは蜘蛛の子のように散らばっていく。

七瀬「残念だけど、また今度遊ぼうね。お兄ちゃん、お姉ちゃん！」

そう言って、七瀬も戻っていく。

？「ここで、立ち話もなんだし、上がってくれ」

そう言って、寺子屋の一室に案内された。

先ほどの少女が、お茶を入れて戻ってくる。

自分達の正面に座り、凜とした声でしゃべりだした。

慧「さて、まずは自己紹介をしよう。私は上白沢慧音、この寺子屋で教師をしている」

彩「俺は狂咲彩人、博麗神社で修行中の外来人だ。こっちは俺の愛刀の付喪神で俺の家族、名前は咲姫に舞花だ」

俺の挨拶に合わせ、二人は軽く会釈をする。

慧「彩人に咲姫と舞花だな、よろしく。しかし外来人か、なるほど、始めて見るがどおりでこくらじゃ見かけない服装をしているわけだ」

慧音が一人納得しこちらをまじまじと見てくる。
「なんだか居心地悪いな。」

彩「それで、話というのはなんですか？」

話が進みそうに無いのそこっ恥ずかしいのでこちらから切り出した。
慧音は咳払いをし、いきなり頭を下げ謝罪と感謝をしてきた。若干、頬が赤い気がする。

慧「そうだったな。彩人、咲姫に舞花、面倒をかけてすまなかった。それと、皆を守ってくれてありがとう」

おそらく、七瀬を助けた時の事を言っているのだろう。
正直、自分としては子供が死ぬと聞かされて、放って置くほど人間捨ててないし―最近、人間離れしてきたけど―あの馬鹿どもに関しては、腹が立ったから言いたい事を言っただけだし、それが結果として守ったって事になったんだろうけど。

彩「別に、七瀬の件は確かに助ける気でやったけど、助六達の事に関しては結果的にそうなったただだよ。どちらも俺が勝手にやった事だ」

だから、感謝する必要は無い、そう伝えたのだが、

慧「それでも、あのままじゃ皆森に突っ込んで行っただろうし、私

では止めることは難しそうだった。七瀬も無事だったかは分からない、だから・・・」

ありがとう、と年相応だがとても綺麗な笑顔を見せてくれた。

おそらく、何かお礼をするまでは引かないだろう。そういう雰囲気だ。

だから、こんな笑顔が見れたのだから、労働の報酬としては十分だ。

彩「それじゃ、慧音のその綺麗な笑顔が見れたから今回の件はそれでおしまい！それでいいな？」

多少強引だが、この子はかなり義理堅い性格のようだし、こうでもしないと納得しないだろう。

予想通り、慧音は顔を赤らめながらも、納得していないようだった。

慧「なっつっ！何を言っているんだ、お前は！／＼／＼」

彩「慧音だって、皆が笑っていられるように皆の事守っているんじゃないの？」

その言葉に慧音は押し黙る。何か言いたそうにしているが、かまわず続ける。

彩「今回の事で、七瀬も慧音も不特定多数の人も無事だった事を喜んで、今を生きている。俺としてはそれで十分なんだよ。慧音は違うのか？」

慧「私だってそうだ。だから人里の守護者をやっている。」

慧音は力強く言った。

彩「人一人ができる事なんてたかが知れてる、今回は慧音一人じゃないに負えなかった。だから、代わりじゃないけど俺達があの子を助けた。それだけのことなんだよ」

慧音もどうやら納得したようだ。
それと、一つ約束をさせる。

彩「慧音、これからは一人で全部背負おうとするな。慧音が傷ついて喜ぶ奴なんてここには居ないからな。どうしても、一人じゃ無理だと思うなら、俺達を頼れ。お前が守りたいものくらいお前ごと守ってやるよ」

そう言つて、さわやかに笑つてやった。

それを聞いた慧音は顔を赤くしながらも、控えめに頷いた。

彩「それじゃ、そろそろお暇するわ」

冷めたお茶を一気に煽り立ち上がる。

それに合わせるように咲姫と舞花も立ち上がる。

慧「もう行くのか？いろいろと話をしたかったんだが」

慧音は少し残念そうに言う。

彩「いや、授業しないといけないだろ？」

慧「あつ！」

どうやら、忘れていたらしい。

子供たちが騒いでいる声が聞こえてくる。

彩「また今度、授業が無い日にでも、な？」

慧「わかった、また今度だな」

そついい残し、慧音は教室へ、俺達は稗田の屋敷に向かった。

稗田の屋敷は、里で一番大きいとの事だったのですぐに見つけることが出来た。

途中で手土産を買っていくのも忘れない。

規模、装飾、建築美、全てにおいて他の家の追随を許さない造りは、なるほど、九代も続いているにふさわしい景観だった。

彩「でつかいな」

舞姫「おおきいね」

咲姫「おおきいですね」

三人そろって同じ感想を口にする。それだけ、大きいのだ。

屋敷の門にいる門番に当主に会いたい、と言うと意外にもあっさり中へ通してくれた。

外見もすごかったが中もすごかった。

特に庭なんかどこぞの高級料亭も顔負けの造りだった。

ある部屋の前で使用人が止まる。

どうやらここが当主様の部屋のようなのだ。

使用人が声をかける。すると・・・、

？「入りなさい」

声を聞いたとき、驚いた。

その声は女性で、自分よりも年下のようだからだ。

使用人に中へ案内され、おそらく当主であろう「やはり見た目は自分よりも幼い少女だ」の目の前に座る。

使用人は出て行き、襖が閉められたと同時に少女が口を開く。

阿「ようこそいらつしゃいました。私は稗田家九代目当主、稗田阿求と申します。」

阿求と名乗った少女は外見からは考えられないくらい大人びていた。その一挙手一投足がとても優雅だ。なんというか華がある。

彩「俺は狂咲彩人、博麗神社で修行中の外来人だ。こっちは俺の愛刀の付喪神で俺の家族、名前は咲姫に舞花だ。今日は、幻想郷縁起を書いていって聞いたものでね、それを出来れば見せてもらいたくて訪ねた次第だ」

その言葉に阿求はうれしそうに笑みを浮かべ、

阿「お安い御用ですよ、一番最近の物でよろしいですか？」

彩「ああ、かまいませんよ」

少女はクスツと笑い、

阿「別に畏まらなくてもいいですよ。私も少し砕けますから」

と言っても、あまり変わらないように見えるが、せつかなのでお言葉に甘える。

阿求は使用人に指示を与えると、こちらに話しかけてきた。

阿「それですね、お願いがあるのですが・・・」

どうやら、俺達の事は結構噂になっているらしく、阿求が、俺達が来たら通すように門番に指示を出していたらしい。

だから、あんなにあっさりと通してくれたのか。

それで、人里の女の子を救った俺達を幻想郷縁起に乗せたいのでいろいろ話を聞きたいそうだ。

別に、不都合もないし、俺が幻想郷縁起を呼んでいる間に咲姫と舞花が話をするという事に決まった。

たまに俺も補足程度に会話に参加するけどね。

少年読書中・・・

少女達おしゃべり中・・・

幻想郷縁起とは、どうやら厳密には危険な妖怪への対処の方法が書かれたものらしく、妖怪の山などは近づかない方が良いと書かれていた。その他にも歴史とか。

阿求達は、この間にかかなり仲良くなったらしく今はきゃいきゃいとおしゃべりしている。

さて、そろそろお昼時だし、神社に帰りますか。

そっちもひと段落したようだし。

彩「それじゃ、そろそろ帰るよ。それと、なかなか面白かったよ」

そうお礼を言う。

阿「ありがとうございます、そう言っていただけと書いた方としてもうれしいです」

阿求は咲姫達と仲良くなったためか、かなりくだけた風に笑う。
漫画だったら、にぱーと言う擬音語が書いているだろう。

阿「またいつでもいらしてくださいね。歓迎しますから」

咲姫「さようなら」

舞花「またね」

阿求と別れ、昼食を摂るために博麗神社へと向かった。

子供と歴史と少女達の雑談（後書き）

次回の投稿は来年の一月三日以降になると思います。
今年はこれで最後の投稿です。
皆様、良いお年を。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8001y/>

東方夢桜歌 ~ A little tenderness and some courage ~

2011年12月29日22時49分発行